

紙版ニューズレター最終号

目 次

会長挨拶.....	2
ニューズレター電子化のお知らせ.....	2
♪高知の城下へ来てみいや♪ 四国で初の学会行事～公開講演会の開催～.....	3
第 29 回日本中東学会年次大会の開催について.....	5
第 15 期（2013～14 年度）役員選挙について.....	5
アジア中東学会連合 AFMA 大会開催について.....	6
第 4 回中東研究世界大会（WOCMES-4）のお知らせ.....	7
理事会・総会報告.....	7
第 28 回年次大会報告.....	17
【大会プログラム】.....	17
【公開イベント：シンポジウム】.....	20
【研究発表の会場から】.....	23
【大会を終えて】.....	40
【年次大会の改善に向けて】.....	41
【大会決算】.....	43
『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告.....	43
地域研究学会連絡協議会報告.....	45
会員の異動.....	45
寄贈図書.....	48
事務局より.....	50
編集後記.....	51

会長挨拶

日本中東学会会長職に就いてから二度目の年次大会を無事終えて、実はほっとしているところです。好天にも恵まれて盛会でした。韓国中東学会からは会長・事務局長を含めて8名も来日し、イラクからも、またエジプトからも多数の参加者がありました。近年にない数の外国からの参加者であり、よろこばしい傾向だと思います。今大会では東洋大学ならではの企画もあり、また東洋大学からは大会開催のための補助金もいただくことができました。いろいろとご苦勞いただいた大会実行委員長の三沢伸生会員と同事務局長の子島進会員には心からお礼を申し上げる次第です。次回の年次大会は大阪大学大学院言語文化研究科・外国語学部をお願いすることになっています。

昨年の3・11以降、何かが変わってしまったようです。今年は天候不順で、気温の上下降が激しいようです。異例の早さで台風4号が6月中旬に日本を直撃しました。余震もずっと続いています。放射能汚染がどこまで広がるのかもまったく見当が付きません。そんな中、エジプト大統領選挙の決選投票の結果が6月24日ようやく選挙管理委員会より公表されました。ところが、テレビのニュースを見てみると、「イスラム原理主義組織ムスリム同胞団」の候補者が決選投票で当選したと報じています。いい加減、「イスラム原理主義」という言葉はやめてもらいたいものですが、やはりこの表現ほどイメージ喚起的な効果をもつ言葉はないのでしょうか。その意味では日本中東学会の影響力はまだまだ不十分だといわなければならないのかもしれないかもしれません。

学会の仕事としてはそろそろ考えなければならないのは次期の役員選挙の日程です。役員選挙は引き継ぎとの関係で、年内に結果が出るような日程を組んで実施したいと考えています。日本中東学会には恒常的に事務機能を果たす場所がありません。したがって、役員改選のたびに事務局をどこに引き受けてもらわねばならないのです。複数の会員を抱える大学・研究機関に引き受けてもらうのが理想ですが、それでも近年、大学教員自身が異常に忙しくなりすぎてなかなか引き受け手がいないのが実情です。学会の抱える問題として今後とも考えていかなければならない課題の一つです。

(臼杵陽)

ニューズレター電子化のお知らせ

日本中東学会では昨年春よりニューズレターの電子化について話し合いを行ってきました。昨年7月に発行されましたニューズレター125号では電子化に關す

るアンケートを実施しました。その結果、アンケートにお答えいただいた会員の 9 割以上が電子化に賛成という結果になったことはニューズレター126 号でご報告した通りです。その結果を受けまして、第 14 期理事会では 2012 年度からニューズレターを電子化する方針を決め、5 月 12 日の会員総会にてその方針が承認されました。今後は公開の方法や発行頻度について担当理事と事務局が話し合いを進めていきますが、印刷版のニューズレターは本号が最終号となります。

ニューズレター127 号でも、総会でも強調した通り、インターネットやコンピュータに日常的にアクセスできない会員が、ニューズレターの電子化によって学会活動の情報を得ることができなくなるという事態は避けなければなりません。このため、電子版ニューズレターを受け取ることができない会員には電子データを印刷して郵送いたします。メールで連絡可能な会員につきましては電子版をお受け取りくださいますようお願い申し上げます。

電子版ニューズレターの受け取りに支障のある会員は、お手数ですが、印刷されたニューズレターの郵送を希望する、と事務局までお知らせください。

129 号以降のニューズレター発行のお知らせとダウンロード方法の説明は、会員データベースに登録されているアドレスに直接お送りする予定です。もしメールアドレスに変更がありましたら、連絡可能な新しいアドレスを事務局にお知らせください。

会員の皆様のご理解とご協力をお願いします。 (山岸智子・新井和広)

♪高知の城下へ来てみいや♪ 四国で初の学会行事 ～公開講演会の開催～

今年の公開講演会を下記の通り開催します。会員の方々もこれを機会に土佐の高知を訪れられてはいかがでしょうか。

日本中東学会第 18 回公開講演会

「交感する『自由』—— 近代のイスラーム世界と日本、そして今」

日時 2012 年 10 月 27 日 (土) 13:30-17:30 (開場 13:00)

会場 高知新聞放送会館・高新文化ホール

〒780-0870 高知県高知市本町 3 丁目 2-15 電話 088-825-4321

2011 年初めからアラブ諸国で連鎖的に発生してきた市民的革命運動は、現在もなお世界の注目を集めています。そこで共通して叫ばれてきたキーワードが「自由」、アラビア語の「フッリーヤ」でした。これはもともと「奴隷」に対する「自由人」の立場を表すイスラーム法の言葉に由来しますが、近代になって植民地支配からの「解放」の意味で使われるようになりました。一方、日本において「自由」が最初に政治的な問題となったのは明治の自由民権運動の時期でした。



写真：重要文化財 高知城

1870 年代から 80 年代にかけて、藩閥政府の専制的な政策に対して高知や福島をはじめ諸地方の反発が高まりましたが、そこで唱えられた「自由」は、当時日本が置かれていた国際的な環境と密接に関連して反帝国主義的な「アジア主義」に発展する芽を胚胎していました。自らのあり方を自ら決められるようにすること、これが広くアジアに共通して希求されていたのです。そして、イスラーム世界と日本とは、人的な交流関係を通じて、西洋（ロシアやアメリカも含めて）に対抗するための様々な戦略が、第二次世界大戦に至るまで相互的かつ活発に企図されていたのです。本講演会では、第一線の研究者が、かつて切り結ばれた双方向的関係について論じるとともに、現代の中東と日本の社会状況を参照しながら、その今日的な意義について考えます。

プログラム

挨拶 臼杵陽（日本中東学会会長・日本女子大学）

趣旨説明 黒木英充（東京外国語大学）

講演 1 ジョエル・ヨース（高知県立大学）「自由民権運動におけるアジア主義」

講演 2 小松久男（東京外国語大学）「明治日本とイスラームー時代の空気を読む」

コメント 臼杵陽、辻上奈美江（高知県立大学）

司会 黒木英充

*一般公開・無料

問い合わせ先 日本中東学会事務局

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1

慶應義塾大学商学部 新井和広研究室内

Tel & Fax: 045-566-1247 (連絡はなるべくメールかファックスをお願いします)

e-mail: james@james1985.org

なお、本講演会は文部科学省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の助成を受けて行われます。
(黒木英充)

第 29 回日本中東学会年次大会の開催について

2013 年度の日本中東学会第 29 回年次大会は、大阪大学外国語学部と言語文化研究科が担当校となりました。日程と会場は 5 月 11 日（土）が大阪大学豊中キャンパス、12 日（日）が箕面キャンパスとなっています。

実行委員会は同校の教員および同校関係者を中心に、日本中東学会の役員も加わり構成されます。実行委員会では、土曜日の公開講演会等を、これから力を入れて企画していきたいと思っております。会員の皆様方には、是非多数ご参加いただきたく存じます。季節のよい 5 月の大阪で皆様とお目にかかるのを楽しみにいたしております。
(高階美行)

第 15 期（2013～14 年度）役員選挙について

現在の第 14 期理事会の任期が 2013 年 3 月 31 日に満了となるため、2013～14 年度の第 15 期役員選挙を本年 9～12 月にかけて行います。役員選挙日程は以下の通りです。9 月 26 日から 12 月 21 日にかけて、暫定有権者名簿（有権者は正会員となります）の送付、投票および開票作業を経て、年末には、第 15 期理事会の新しい顔ぶれが揃う予定です。今回の選挙は例年に比べて日程が若干前倒しになっているため御注意ください。

会則第 7 条には、「会長は本学会を代表し、会務を総括する。評議員は会長の諮問に応じる。理事は本学会の事業の運営にあたる。」とあり、評議員を含めた役職者全員で、学会運営が行われることとなります。評議員として選任される会員も、学会奨励賞の推挙や会長からの諮問や事務局からの依頼事案に対応していただくことを期待されている重要な役職であることを改めて申し添えます。

今回の役員選挙につきまして、会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

(新井和広)

第 15 期役員選挙日程

9 月 19 日（水）	メーリングリストによる選挙予告、学会費支払い呼びかけ
9 月 26 日（水）	暫定有権者名簿送付
10 月 10 日（水）	選挙権確定のための会費納入締め切り
10 月 24 日（水）	評議員選挙投票用紙等発送
11 月 15 日（木）	評議員選挙投票締め切り（消印有効）
11 月 30 日（金）	評議員選挙開票
12 月 3 日（月）	理事選挙投票用紙等発送
12 月 17 日（月）	理事選挙投票締め切り（消印有効）
12 月 21 日（金）	理事選挙開票、ただちに理事就任依頼
12 月下旬	理事確定、新旧合同理事会日程調整
1 月上旬～中旬	新旧合同理事会、会長選任→事務局長選任

<役員選挙関連の会則と細則>

会則第 8 条

- (1) 会長は理事の中から、互選によって定める。
- (2) 評議員は正会員の中から、正会員の投票により選任する。
- (3) 理事は評議員の中から、互選によって定める。但し、理事会は会員の中から特定の任務など必要に応じて理事若干名を追加することができる。
- (4) 監事は理事会の推薦をへて、総会において選任する。

細則 VIII. 役員選挙について

1. 理事会指名による 4 名（監事 1 名を含む）が選挙管理委員会を構成するものとする。
選挙管理委員会は、評議員、理事の選挙を実施・管理するものとする。
2. 選挙によって評議員 60 名以内、理事 15 名を選出するものとする。
3. 同点の場合の選出法は、抽選によるものとする。

アジア中東学会連合 AFMA 大会開催について

日本中東学会は、韓国中東学会、中国中東学会、モンゴル中東学会とともに、アジア中東学会連盟（AFMA）を構成しています。AFMA は 2 年に一度大会を開催し、各加盟学会が輪番で主催を担当しています。前回の大会は 2010 年に北京で開催されました。

2011-12 年の担当学会は、韓国中東学会（KAMES）となりますが、KAMES の AFMA 大会実行委員長から以下のような AFMA 大会開催案内と参加申込のお知らせが寄せられました。

第 9 回 AFMA（アジア中東学会連盟）大会

日時：2012 年 10 月 5～6 日（金～土）

開催場所：プサン、韓国

参加費：200 米ドル

それを受けて会員に報告希望を募ったところ、14 報告（15 報告者）の応募があり、KAMES に伝えたところ、全員の報告が認められました。

次々回 2014 年の大会は日本中東学会が主催の予定となっています。会員各位におかれましては、2 年後の日本 AFMA 開催をご予定に入れられますよう、お願いします。（酒井啓子）

第 4 回中東研究世界大会（WOCMES-4）のお知らせ

2002 年にドイツ・マインツ、2006 年にヨルダン・アンマン、2010 年にスペイン・バルセロナで開催された中東研究世界大会（WOCMES）の第 4 回大会の詳細が固まりましたので、お知らせいたします。

場所：トルコ共和国・アンカラ、中東工科大学（METU）キャンパス

日程：2014 年 8 月 18～22 日

主催：Middle East Technical University (METU) and Turkish Social Science Association

パネル・個別発表の申し込み等の情報が届きましたら、その都度会員の皆様にお知らせいたします。（東長靖）

理事会・総会報告

【2012 年度第 1 回理事会】

日時：2012 年 5 月 12 日（土）10:00～12:00

場所：東洋大学白山キャンパス大学院（5 号館）5201 番教室

出席：臼杵陽、小松久男、小杉泰、長沢栄治、青山弘之、大稔哲也、黒木英充、飯塚正人、三浦徹、林佳世子、山岸智子、酒井啓子、新井和広

欠席：桜井啓子、東長靖

〔議題〕（議題の詳細については次ページ以降の総会報告もご参照ください）

1. 2011 年度事業報告・2011 年度決算報告を承認した（詳細は総会議事録参照）。
2. 2012 年度事業計画・2012 年度予算案を承認した（詳細は総会議事録参照）。
3. 『日本中東学会年報（AJAMES）』第 27 号編集報告を受け、第 28 号編集計画を承認した（詳細は総会議事録および『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告参照）。
4. 日本中東学会ニューズレターを、現在の紙媒体から電子媒体へ移行することを承認した。
5. 日本中東学会ウェブサイト（ホームページ）を国立情報学研究所のスペースからレンタルサーバに移行し、同時にドメイン（james1985.org）を取得したことが報告された。
6. 2012 年度公開講演会開催について承認した（詳細は総会議事録参照）。
7. 会員動向について報告があった（詳細は総会議事録参照）。
8. 総会資料を確認した。
9. 次期評議員・理事会選挙を例年より前倒しで実施することを承認した。
10. 地域研究会連絡協議会における日本中東学会の活動について報告があった。

【日本中東学会第 28 回年次総会報告】

日時：2012 年 5 月 12 日（土）17:30～18:30

会場：東洋大学白山キャンパス 6 号館地下 6B12 教室

出席：当日出席者 74 名、委任状提出 141 名、計 215 名

（会員数 672 名、定足数 5 分の 1 の 135 名により、総会成立）

1. 司会および総会役員の選出

清水和裕会員の司会により、議長として塩尻和子会員、書記として山尾大、吉村貴の両会員、議事録署名人として赤堀雅幸、三代川寛子両会員を選出した。

2. 2011 年度事業報告および決算

新井和広事務局長および各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 事業報告（報告：新井和広事務局長）

- ・ 第 27 回年次大会を、2011 年 5 月 21 日～22 日に京都大学吉田南キャンパスにおいて開催した。
 - ・ 朗読劇「The Message from Gaza～ガザ、希望のメッセージ～」
 - ・ シンポジウム「抵抗の文学～世界文学の中のパレスチナ～」

- ・研究発表 8 部会 57 本、企画セッション 2 本。
- ・韓国中東学会から Kim Dae-Sung 会長と Oh Chong-Jin 国際交流委員長を招待した。
- ・日本中東学会年報（AJAMES）第 27-1 号、第 27-2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。
- ・刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「学術定期刊行物」の助成を受けた。
- ・海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
- ・国立情報学研究所論文情報ナビゲータ（CiNii）上で公開されるよう手配した。
- ・第 17 回公開講演会「庄内からイスラームを考える」を、2011 年 11 月 12 日に、山形県酒田市総合文化センターにおいて開催した。
- ・ニューズレター和文 4 回（総頁 106 頁）を発行した。第 124 号（5/13、22 頁）、第 125 号（7/14、年次大会特集、46 頁）、第 126 号（11/5、18 頁）、第 127 号（2012/2/10、20 頁）。
- ・「日本における中東研究文献データベース 1989-2010」（日本語版、英語版）につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- ・学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行った。学会ウェブサイトについては国立情報学研究所内のスペースから外部のサーバへ移行し、リニューアルを行うと同時に学会のドメイン（james1985.org）も取得した。
- ・地域研究学会連絡協議会の幹事組織として、地域研究の興隆を図るとともに、大稔哲也理事が担当して相互交流に努めた。
- ・韓国中東学会国際会議（2011 年 8 月 31 日～9 月 1 日）に招待を受け、臼杵陽会長、新井和広事務局長が参加し発表を行った。
- ・東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行った。
- ・2011-2012 年度会員名簿を刊行した。
- ・要請により、日本西アジア考古学会第 19 回西アジア発掘調査報告会を後援した。
- ・会員の増減：2011 年度中には入会者 19 名、退会者 39 名（うち逝去による退会 1 名、会費滞納による退会 21 名）の異動があった。その結果、2011 年度末退会予定者も含めた 2012 年 3 月 31 日現在の会員数は 704 名（正会員 542 名／うち海外在住 14 名；学生会員 162 名／うち海外在住 7 名）となった。

- ・ 会員数は減少傾向である。
- (2) 日本中東学会年報 (AJAMES) 第 27-1 号、第 27-2 号編集報告 (青山弘之前編集委員長)
- ・ AJAMES 第 27-1 号、第 27-2 号が無事刊行・発送された。
 - ・ 27-1 号は 2011 年 7 月に刊行・発送された。投稿総数 25 本のうち 15 本が採用された。採用原稿の内訳は、論文 4 (うち英語 0)、研究ノート 2 (うち英語 0)、特集 2 (総論 2+論文 6、すべて英語)、書評 6 (うち英語 3)、博士論文要旨 1 (うち英語 1) であった。
 - ・ 27-2 号は、2012 年 1 月に刊行・発送された。投稿総数 15 本のうち 5 本が採用された。採用原稿の内訳は、論文 3 (うち英語 1)、研究ノート 2 (うち英語 0) であった。
 - ・ CiNii の利用状況に関しては、2010 年度の閲覧総数 4250 に対し、2011 年度の閲覧総数は 4730 と増加した。今後も活発な利用をお願いしたい。
- (3) 2011 年度決算報告 (報告：新井和広事務局長)
- ・ 業務が効率化されたため、アルバイト謝金が当初の予想より低くなった。
 - ・ 通信費が当初予算より多いのは、ニューズレター電子化についての意見を募るため、ハガキを購入したからである。
 - ・ AJAMES 印刷製本費が当初予算より費用が多いのは、ページ数増加のためである。
 - ・ 公開講演会開催費については、一部講演者が自費で参加したり、その他の支出を抑えたりしたため、当初の予想よりも低い決算額になった。
 - ・ 国際交流費の決算額が 0 になったのは、国際交流基金から助成金を得たためである。
- (4) 監査報告 (報告：高橋圭監事)
- ・ 慶應義塾大学日吉キャンパスにて、岩崎えり奈監事と 2011 年度の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。
- < 質疑応答 >
- ・ 特になし
- < 採決 > 以上の 2011 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。
3. 日本中東学会会則細則改正および日本中東学会年報 AJAMES 編集委員長の選出
- (1) 日本中東学会会則細則改正の提案 (三浦徹財務・会則担当理事)
- 三浦徹財務・会則担当理事より、日本中東学会会則細則改正の提案がなされた。

詳細は下記の通りである。

<改正の趣旨>

会誌（AJAMES）編集委員長は、同誌発行が日本中東学会の活動のなかで重要な位置を占めることから、今後、役員選挙により選ばれた理事がその任にあたることを、会則細則に明記する。また、理事の役割分担のなかで、会誌担当理事が他の職務と兼務することなく会誌担当の任にあたるようにするため、理事の数を増員する。

<細則>

現行	改正案
VI. 会誌編集委員会について 1. 理事会は、会誌発行のために編集委員長を任命し、また編集委員若干名を委嘱する。編集委員長および編集委員は編集委員会を構成する。	VI. 会誌編集委員会について 1. 理事会は、会誌発行のために、 <u>役員選挙によって選出された理事のなかから編集委員長を任命し、また会員若干名を編集委員に委嘱する</u> 。編集委員長および編集委員は編集委員会を構成する。
VIII. 役員選挙について 2. 選挙によって評議員 60 名以内、理事 13 名を選出するものとする。	VIII. 役員選挙について 2. 選挙によって評議員 60 名以内、理事 <u>15</u> 名を選出するものとする。

<質疑応答>

- ・ 特になし

<採決> 以上の日本中東学会会則細則改正の提案について、総会はこれを承認した。

(2) AJAMES 編集委員長選出報告および理事の任務分掌（新井和広事務局長）

- ・ 2012 年度第 1 回理事会で承認された、AJAMES 編集委員長選出と、それともなう理事の任務分掌変更について報告があった。
- ・ 林佳世子理事を AJAMES 編集委員長に選出した。任期は 2012 年度 1 年である。
- ・ 新 AJAMES 編集委員長選出にともない、新井和広事務局長がウェブサイト（ホームページ）担当理事（事務局長と併任）に、青山弘之前 AJAMES 編集委員長が AJAMES 編集担当理事になった。
- ・ 国際交流委員長は長沢栄治理事が務めていることが報告された。（前回総会では報告されなかったため、改めて報告を行った。）

4. 2012 年度事業計画および予算

新井和広事務局長および各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 事業計画（報告：新井和広事務局長）

- ・ 第 28 回年次大会を 2012 年 5 月 12～13 日に、東洋大学白山キャンパスにおいて開催する。
- ・ 開催にあたり、東洋大学の助成を受ける。
- ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第 28-1 号（2012 年 7 月）、第 28-2 号（2013 年 1 月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。
- ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「学術定期刊行物」の助成を受ける。
- ・ 第 18 回公開講演会「交感する「自由」——近代のイスラーム世界と日本、そして今」を、2012 年 10 月 27 日に、高知県高知市において開催する。
- ・ 開催にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公開発表(B)」の助成を受ける。
- ・ ニュースレターを年数回発行する。また、ニュースレターの形態について、現在の紙媒体から電子媒体へ移行する。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2011」（日本語版、英語版）につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
- ・ 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
- ・ 海外の関連学会との交流を促進する。
- ・ 第 28 回年次大会に、韓国中東学会から Hah Byung-Joo 会長、Youn Yong-Su 事務局長を招待する。
- ・ アジア中東学会連合第 9 回大会（AFMA9、2012 年 10 月 5～6 日、釜山）について、担当の韓国中東学会に協力する。
- ・ 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
- ・ 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行う。
- ・ 要請により、「小堀巖先生追悼シンポジウム」（2012 年 6 月 4 日、国連大学・タントホール）を後援する。
- ・ 第 15 期役員選挙を実施する。

(3) 日本中東学会年報（AJAMES）第 28-1 号、第 28-2 号編集計画、2012 年度編集体制（林佳世子編集委員長）

- ・ AJAMES 第 28-1 号は 2011 年 12 月より審査を開始し、2012 年 7 月に刊行・発送の予定。投稿総数 14 本のうち 9 本が採用された。採用原稿の内訳は、論文 5（うち英語 1）、研究ノート 0、書評 1（うち英語 1）、博士論文要旨 3（うち英語 3）であった。
- ・ AJAMES 第 28-2 号に関しては、2012 年 6 月 1 日締め切り、2013 年 1 月に刊行・発送の予定。
- ・ 編集体制としては、林佳世子会員が編集委員長、青山弘之、飯塚正人、桜井啓子会員が副編集長となった。その他の編集委員は留任した。
- ・ 欧文の論文を積極的に投稿していただきたい。

(4) 2012 年度予算案（報告：新井和広事務局長）

- ・ 公開講演会開催のための科学研究費補助金に採択されたため、公開講演会開催費として 100 万円を計上した。
- ・ 東洋大学から学会開催のための助成 30 万円を受けることができた。
- ・ AJAMES 印刷製本費については、科学研究費補助金の書類（業者による見積額）に合わせる形で予算を計上した。
- ・ 従来は同じ枠であったニューズレター発送費と AJAMES 国内発送費を別枠で計上した。これは AJAMES 発行のために科学研究費補助金による助成を受けているため、会計を明確化するためである。
- ・ ニューズレター等の発行費については、2012 年度よりニューズレターを電子化するため、予算額を 50 万円から 15 万円に減額した。

<質疑応答>

- ・ 宮治美江子会員から、AJAMES 刊行のために助成を申請する際に、会費納入率が一定の水準以下の学会の刊行物は却下される事例があるが、2012 年度予算案に書かれている納付率で問題はないかとの質問があった。これに対して、三浦会員から以下のような説明があった。つまり、予算案に書かれている納付率と、出版助成の審査の際に参照される納付率は計算方法が全く違い、別物である。本会は前納制度をとっており、最終的には納入率は 80%を超えるため、問題とはならない。しかし、今後も会員に会費納入を呼びかけていきたい。
- ・ 吉村貴之会員からニューズレターの電子化について、会員の意見は確認したのか、一律強制的に行われるのかどうかとの質問があった。これに対して、新井事務局長から、会員には昨年アンケートを取ったこと、ネットにアクセスできない会員には配慮すること、安全かつ確実な配布方法を検討中である

ことが説明された。

＜採決＞ 以上の 2012 年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

5. その他

特になし

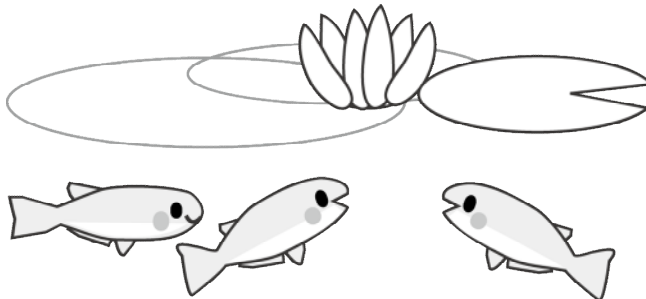
6. 会長挨拶（臼杵陽会長）

臼杵陽会長から挨拶があり、理事の世代交代への期待等が述べられた。（会長挨拶の全文は、本ニューズレターに収録されています。）

7. 議事終了

議事終了につき議長が降壇し、司会者により総会の閉会が宣言された。

（新井和広）



2011 年度決算

本会計

収 入	11 年度予算	11 年度決算
2010 年度よりの繰越金	9,620,727	9,620,727
年会費	5,643,000	5,573,000
正・学生会員	5,643,000	5,573,000
2008 年度以前分	46,000	44,000
2009 年度分	180,000	85,000
2010 年度分	321,000	275,000
2011 年度分	1,317,000	1,294,000
2012 年度分	3,779,000	3,720,000
2013 年度以降分	0	155,000
賛助会員	0	0
その他	2,796,740	2,345,483
科研費出版助成金	900,000	900,080
科研費公開講演会助成金	0	0
利子	500	153
AJAMES 販売代金	250,000	341,970
AJAMES 掲載料	0	4,765
海外郵送料実費	0	0
AJAMES 広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	600,000	600,000
国際交流基金助成金	846,240	314,990
NII-ELS 著作権料	200,000	183,525
雑費	0	0
収入合計	18,060,467	17,539,210

(単位:円)

2012 年度への繰越金内訳	10,123,061
郵便振替口座	8,955,332
三井住友銀行口座	1,119,278
Paypal 口座	24,030
現金	24,421

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2010 年度よりの繰越金	623,104	
第 27 回年次大会余剰金	0	
利子	93	
2012 年度への繰越金		623,197
合計	623,197	623,197

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2010 年度よりの繰越金	1,503,741	
奨励金		0
利子	240	
2012 年度への繰越金		1,503,981
合計	1,503,981	1,503,981

(単位:円)

支 出	11 年度予算	11 年度決算
事務局費	2,620,000	2,093,100
アルバイト謝金	1,700,000	1,379,250
通信費	70,000	110,950
消耗品費	200,000	179,982
会議費	35,000	28,443
交通費	100,000	56,550
振込手数料	20,000	21,645
事務局備品費	350,000	205,280
事務局移転費	50,000	16,500
資料保管費	95,000	94,500
事業費	6,266,240	5,323,049
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	200,000	196,744
AJAMES 編集費	50,000	16,820
同欧文校閲費	300,000	241,129
同印刷製本費	2,000,000	2,200,926
編集委員会交通費	200,000	56,620
ニューズレター等発行費	500,000	474,075
AJAMES/NL 発送費	450,000	477,255
AJAMES 海外発送費	145,000	82,100
選挙費用	0	0
国際交流費	100,000	0
インターネット広報費	70,000	58,380
公開講演会開催費	350,000	199,010
学会奨励賞運営費	0	0
中東文献 DB 更新費	650,000	650,000
地域研究学会協議会分担金	5,000	5,000
国際交流基金助成金	846,240	314,990
特別基金繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	0
支出合計	8,886,240	7,416,149
2012 年度への繰越金	9,174,227	10,123,061
総計	18,060,467	17,539,210

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2010 年度よりの繰越金	22,310	
本会計より繰り入れ	50,000	
利用料(2 名)	10,000	
保育料		44,524
振込手数料		290
利子	5	
2012 年度への繰越金		37,501
合計	82,315	82,315

(単位:円)

2012 年度予算

本会計

収入	11 年度予算	12 年度予算
2010 年度よりの繰越金	9,620,727	—
2011 年度よりの繰越金	—	10,123,061
年会費	5,643,000	5,567,700
正・学生会員	5,643,000	5,567,700
2009 年度以前分	226,000	41,400
2010 年度分	321,000	76,500
2011 年度分	1,317,000	261,950
2012 年度分	3,779,000	1,472,050
2013 年度分	—	3,715,800
賛助会員	0	0
その他	2,796,740	3,250,500
科研費出版助成金	900,000	900,000
科研費公開講演会助成金	0	1,000,000
利子	500	500
AJAMES 販売代金	250,000	250,000
海外郵送費実費	0	0
AJAMES 広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	600,000	600,000
国際交流基金助成金	846,240	0
東洋大学学会開催助成金	0	300,000
NII-ELS 著作権料	200,000	200,000
収入合計	18,060,467	18,941,261

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額および納付率

年度	未納額	前年度(2011 年度)納付率
2008 年度分		13%
2009 年度分	230,000	13%
2010 年度分	425,000	26%
2011 年度分	845,000	54%
2012 年度分	2,495,000	61%
2013 年度分	5,630,000	
合計	9,625,000	

上の表の見方は以下の通り

未納額:本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額

前年度納付率:予算策定年度の前年度(たとえば 2012 年度

予算であれば 2011 年度)決算における会費納付額

÷前年度予算に書かれている未納額

* 2012 年度予算に書かれている各年度(2009～2013 年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の 2011 年度における納付率(=2011 年度決算における会費納付額÷2011 年度予算に書かれている未納額)に 5%を足した値を掛けることによって算出している

例)2012 年度分会費収入予算(2012 年度分会費予想収入)

=2012 年度分会費未納額×(2011 年度分会費納付率+5%)

=2,495,000×(54%+5%)=1,472,050

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2011 年度よりの繰越金	37,501	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	10	
2013 年度への繰越金		87,511
合計	87,511	87,511

(単位:円)

支出	11 年度予算	12 年度予算
事務局費	2,620,000	2,150,000
アルバイト謝金	1,700,000	1,500,000
通信費	70,000	100,000
消耗品費	200,000	200,000
会議費	35,000	35,000
交通費	100,000	100,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	350,000	100,000
事務局移転費	50,000	0
資料保管費	95,000	95,000
事業費	6,266,240	5,674,925
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	200,000	100,000
AJAMES 編集費	50,000	50,000
同欧文校閲費	300,000	300,000
同印刷製本費	2,000,000	1,709,925
編集委員会交通費	200,000	200,000
ニューズレター等発行費	500,000	150,000
NL 発送費	450,000	100,000
AJAMES 国内発送費		270,000
AJAMES 海外発送費	145,000	145,000
選挙費用	0	150,000
国際交流費	100,000	100,000
インターネット広報費	70,000	50,000
公開講演会開催費	350,000	1,000,000
中東文献 DB 更新費	650,000	650,000
地域研究学会協議会分担金	5,000	0
国際交流基金助成金	846,240	0
東洋大学学会開催助成金	0	300,000
による年次大会国際交流費		
託児所特別基金繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	8,886,240	7,824,925
2012 年度への繰越金	9,174,227	
2013 年度会費分留保		3,715,800
2013 年度への繰越金		7,400,536
総計	18,060,467	18,941,261

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2011 年度よりの繰越金	623,197	
利子	100	
2013 年度への繰越金		623,297
合計	623,297	623,297

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2011 年度よりの繰越金	1,503,981	
奨励金		0
利子	300	
2013 年度への繰越金		1,504,281
合計	1,504,281	1,504,281

(単位:円)

第 28 回年次大会報告

【大会プログラム】

5 月 12 日（土）公開イベント（13:30～17:00）

第 1 部：「ムスリム NGO の理念と活動」

発表：子島進（東洋大学）、細谷幸子（東邦大学）、ダニシマズ・イドリス（同志社大学）

司会：子島進（東洋大学）

第 2 部：「イスラームの怪異」

発表：清水芳見（中央大学）、保坂修司（日本エネルギー経済研究所中東研究センター）

コメント：菊地章太（東洋大学） 司会：三沢伸生（東洋大学）

日本中東学会総会

懇親会

5 月 13 日（日）研究発表

個人発表

第 1 部会

溝渕正季（日本学術振興会）「選択の余地のない戦争、選択の余地のある戦争—なぜイスラエルは軍事力の行使を選ぶのか—」

佐藤尚平（早稲田大学）「水と油：『ブライミー陳述書』（1955 年）とアラビア半島の主権」

河村有介（京都大学、J）「政治経済環境の変化と権威主義体制の生存戦略—エジプト・ムバーラク政権下における食料補助金制度を事例として—」

白谷望（上智大学、J）「「上からの改革」後のモロッコにおける権力構造の再検討—2011 年国民議会選挙の分析を中心に—」

千葉悠志（京都大学、J）「アラブ諸国におけるメディアシティの競合・補完関係——衛星放送の立地に着目して——」

Dimitar M. Dimitrov（一橋大学、J）“Football in the Countries of Arabian Peninsula: Ruling Elites and Sport Development”

第 2 部会

金城美幸（立命館大学）「イスラエルにおけるシオニズム的歴史認識の構築——ベン＝ツィオン・ディヌールの役割を中心に」

今野泰三（大阪市立大学、J）「宗教シオニストの多様化とフロンティアへの植民事業の展開—「ユダヤ的な場所」の生産と対国家関係の変容—」

今井宏平（中央大学、J）「トルコとイスラエルの関係悪化に対するトルコ・ユダヤ人の対応—シャローム紙の分析を中心に—」

鈴木啓之（東京大学、J）「パレスチナ被占領地における「市民的抵抗」の発展—インティファダの背景へのアプローチ—」

平寛多朗（東京外国語大学、J）「アラブ文学史における小説の位置づけ—高校における国語教科書分析を事例に—」

外山健二（常磐大学）「ハーマン・メルヴィルとイスラーム」

第3部会

福島康博（東京外国語大学）「イスラーム銀行におけるシャリーア・ボードとメンバーシップ—マレーシアの事例を中心に—」

黒宮貴義（一橋大学、J）「「オランダ病」の発生の条件：エジプト、サウジアラビアの1970年代から1980年代、2000年代の二つの時期の比較から」

今井静（京都大学、J）「ヨルダンにおける自由化政策と地方経済の変容」

川村藍（京都大学、J）「アラブ首長国連邦（UAE）におけるイスラーム銀行の展開と法制度の実態」

アブラル・アブドアルマナン・バル Abrar Abdulmanan Bar（早稲田大学、J）「サウジアラビア王国における女子大の国際化 The Internationalization of Woman's Universities in the Kingdom of Saudi Arabia: The Case of Effat University」

小島宏（早稲田大学）「東アジアのムスリム移動者におけるハラール食品消費行動の規定要因」

第4部会

店田廣文（早稲田大学）「日本のムスリム・コミュニティと地域社会 射水市における「外国人に関する意識調査」より」

岡井宏文（早稲田大学）「地域住民におけるイスラーム・ムスリム意識—富山県射水市調査の事例より—」

石川基樹（早稲田大学）「地域住民におけるイスラーム・ムスリム意識の規定要因—射水・岐阜調査の事例より—」

重親知左子（兵庫大学非常勤講師）「戦前日本のイスラームをめぐる思想と政策—陸軍大将林銑十郎を中心に—」

竹村和朗（東京大学、J）「都市発展の三様式論の再考 エジプト西部デルタの沙漠開拓地、ベヘイラ県バドル市を事例として」

後藤絵美（東京大学非常勤講師）「二つの裁判のあいだ エジプトにおける憲法第二条の実践と「シャリーア」」

鳥山純子（お茶の水女子大学、J）「2000年代を生きるカイロの「若者」の生：

近代をキーワードに差異を紡ぐ」

第5部会

遠藤春香（京都大学、J）「シャラーニーの聖者論—「完全なる者」の理論を中心に—」

高橋圭（上智大学）「近代エジプトにおける知的交流の場—東洋連盟の事例から—」

安田慎（京都大学、J）「シリア・シーア派参詣地における法学者の活動と役割」

塩崎悠輝（同志社大学）「アフマド・ファターニーのファトワー集—19世紀末から20世紀初めにかけてのマッカと東南アジアの関係—」

若桑遼（上智大学、J）「ターヒル・ハッダードの思想を弾圧したもの：『シャリーアと社会における我々の女性』（1930年）の筆禍事件の検討」

二ツ山達朗（京都大学、J）「モノを通して具現されるバラカの一考察—チュニジアにおけるオリーブの事例から—」

丸山大介（京都大学、J）「マウリドにおけるタリーカ・タサウウフ表象—スーダン・ハルツームにおける預言者生誕祭を事例として—」

第6部会

小笠原弘幸（東洋大学非常勤講師）「古典期オスマン帝国における『系譜書』」

齊藤優子（日本学術振興会）「コレラの発生と検疫所の設置から見るオスマン帝国の公衆衛生改革—ルメリ鉄道沿線を事例として—」

幸加木文（東京外国語大学、J）「トルコ性概念からみたトルコ・イスラームの歴史的展開」

伊藤寛了（東京外国語大学非常勤講師）「1940年代のトルコにおける宗教的言論活動と政府の統制」

藤波信嘉（東京大学）「パヴロ・カロリディのオスマン近代」

宮下（関口）陽子（東京大学）「1960年代後半から70年代前半にかけてのトルコ労働組合連合（Türk-İş）-CHP（共和人民党）関係」

岩坂将充（日本学術振興会）「トルコにおける司法と軍：憲法裁判所と「体制」維持の観点から」

第7部会

鎌田由美子（早稲田大学）「17-18世紀のデカン地方における絨毯生産：デカン美術の観点から」

小澤一郎（東京大学、J）「19世紀後半における西ヨーロッパ諸国からガージャール朝への武器供与：1890年のイギリスによる弾薬筒供与の分析を通じて」

稲山円（東京外国語大学、J）「テヘランにおける女性の宗教実践—女性宗教職能者の役割と位置づけから—」

富永正人（在シリア日本大使館）「「文型」に基づいたアラビア語教育の試み—運

用能力の養成を目指して―」

竹田敏之（京都大学、J）「現代アラブ世界におけるアラビア語辞典の展開―辞書
編纂の伝統と革新―」

第 8 部会

Chang-mo CHOI (Könkuk University): “Reflection on Arabia-Africa in the Mappa
Mundi of Chosŏn Dynasty: A Study based on the *Honil kangni yŏktae kukto chido* or
The Unified Map of Territories and Capitals of the States of 1402”

Chong Jin OH (Hankuk University of Foreign Studies): “Creating Cultural cooperation in
Eurasia through Historical Heritage: Turkic-Altaic Cooperation in Eurasia”

Byung-Ock CHANG (Hankuk University of Foreign Studies): “Recent Nuclear Issues in
Iran and North Korea”

企画セッション

(1) *Middle East from Korean Perspectives (Special Session of KAMES)*

Jeongmin SEO (Hankuk University of Foreign Studies): “Korea’s Changing Interests
in the Arab Gulf”

Joong-Kwan KIM (Dongguk University): “The High Tide of the Korean Wave in
Middle East”

(2) *Iraq from dictatorship to Democracy: some problems of transformation*

Shamran al-Ejli (President of Trustees, Baytul Hikma-Iraq): “Baytul-Hikma and its role
in Iraqi culture after transformation”

Mahmoud al-Qaysi (Head of History Department, College of Arts, University of
Baghdad): “Iraqi Identity: History, People, State, and Ideology, A Historical
Perspective”

(3) *A Study of the January 25th Revolution*

Mai Mohammed Al Moatasim (Cairo University Year 2003 Graduate): “A Glance into
the January 25th Revolution”

Alaa Farouq Mahmoud Ibrahim (Cairo University): “Media and the January 25th
Revolution: Study of language, ideology and power”

Hiroshi TOMITA (Keio University), “Egyptian Art of Consensus Building: Looking
through the Political Process of the January 25th Revolution”

Commentator: Atsushi OKUDA (Keio University)

【公開イベント：シンポジウム】

例年に倣い、初日公開イベントは開催校に関連するテーマでもって 2 部構成の

シンポジウムを催した。

第1部「ムスリム NGO の理念と活動」は、イスラーム圏において信仰に根差しつつ社会的な活動を展開する3つの Faith Based NGO について取り上げた。イスラームの特徴の一つとして「精神的な側面ばかりでなく、広く深く信者の社会生活に根をおろしている」点が繰り返し指摘されてきたが、具体的に社会問題に取り組む NGO の活動とイスラーム的な価値観に接近していくことを試みたのであった。ムスリムが行っているボランティア／NGO 活動については、日本ではこれまであまり情報を得られない状況が続いてきた。しかしながら、実際には、スラムにおける学校やクリニックの運営といった草の根レベルの活動から、全国的な規模での環境問題への取り組み、さらには積極的に国際協力（緊急救援）に従事するものなど、多様な活動の展開を見ることができる。とりわけ今世紀に入って以降、多くの研究者がムスリムの NGO に注目するようになり、地道なフィールドワークの成果が発表されてきた。

具体的に紹介したのは、以下の3団体である。

ハムダルド財団（パキスタン／発表：子島進）は「人類への奉仕を通して、神に仕える」をモットーとする。20世紀初頭にデリーで開業した薬屋に、その歴史は始まる。その後、インドにおいては医学と教育分野において活躍する NGO へと成長する。パキスタンにおいては、分離独立に際してカラチへ移住したムハンマド・サイード氏が創設した（1964年に団体登録）。パキスタンでも老舗 NGO の一つとして知られており、現在、娘のサディア・ラシード氏がその運営にあたっている。この財団の特徴は、ユニバーニ医学に基づく数百種類の薬を製造、販売するハムダルド製薬を、利益をもたらずワクフ財源としていることである。製薬会社の純益は、ハムダルド財団が管理・運用し、公共の福祉（具体的にはユニバーニ医薬産業の発展と教育）に充当されている。寄付に一切依存することなく、自前の財源で活動を展開している。

キャハリーザク介護施設（イラン／発表：細谷幸子）は、中東で最大規模の介護福祉施設である。運営費用は年間約12億円、1700人の入所者（高齢者・障害者・難病患者）に対し、900人の有給スタッフと多数のボランティアがケアにあたっている。運営費の8割が一般からの寄付であり、この中には多額のザカートやサダカが含まれている。また、シーア派イマームへの「願掛け」のお礼奉公として、定期的に施設に通う多くのボランティアが見いだされることが特徴的である。

近年、国外での支援活動に従事する、いわゆる国際 NGO がイスラーム圏でも増加している。特に注目すべきは、トルコとマレーシアの動向であろう。今回は、トルコを代表する国際 NGO の一つであるキムセ・ヨク・ム（トルコ語で「誰か

助けてくれないか」あるいは「そこに誰かいらないか」という救援現場でのかけ声／報告：ダニシマズ・イドリス）をとりあげた。この団体は、トルコのイスラーム思想家、F. ギュレンの影響を受けた社会運動の一環として知られている。1999年、テレビ報道の一環として始まった活動であり、2004年にテレビ局から独立して協会化された。同年より海外活動を開始（バリ島、パキスタン）し、2010年には国連経済社会理事会の協議資格を取得している。

東日本大震災に際しては、2日後には先遣隊が現地入り。在日トルコ人と連携し、支援物資の提供やトルコ料理の炊き出しを行った。被災地の子供たちに奨学金を支給したり、トルコに招待したりするなどの活動も行っている。

今後もイスラーム圏における Faith Based NGO の研究の重要性は、さらに増していくものと考ええる。これらの NGO を導いている理念、イスラーム的慈善制度の活用、そして活動の実際について検討を深めていきたい。活動の実態に加えて、価値観に踏み込んだの NGO 研究は、異文化理解という文脈から、きわめて重要な示唆を投げかけるものとなるだろう。さらに、東日本大震災に際して被災地に駆け付けたキムセ・ヨク・ムの事例は、単に研究にとどまらず、NGO がもつ「ともに支えあって生きる同時代人の営為」としての側面にも、注意を喚起するきっかけとなることが期待される。

イスラーム世界には、『アラビアンナイト』に描かれている、アラジンを助けるランプの精としてのジン、シンドバットが格闘する巨大なロック鳥など、数多くの妖精や幻獣として怪異なるものの存在が広く知られている。こうした怪異なるものはオリエンタリズムと結びついて小説・映画・漫画など様々なメディアを通して誇張して表象され、不思議なイスラームというイメージを構築するうえで大きな役割を果たしてきた。本シンポジウム第2部「イスラームの怪異」では従前、学術的に議論されることが少なかったこうしたイスラーム世界における怪異にまつわる諸問題を検討した。

こうした怪異なるものはイスラーム以前のジャーヒリーヤ時代から存在しているものもあれば、イスラーム誕生以後に認識されたもの、あるいはイスラーム以前にあったものがイスラームの信仰に結びついて変容していったものなど多種多様なものが渾然一体になったものが存在する。またイスラーム世界が拡張するにつれてその地の伝統的な怪異なるものと混合していく事例もみられる。すなわちイスラームの怪異を理解するためには、時系列的な変化変容と地域的な広がりとを考慮する必要がある。

そこで清水芳見（中央大学）「ムスリムと妖怪：ヨルダンとブルネイの事例を中心に」と題する基調発表により中東から東南アジアまでの広域における、ジンの表象について文献収集とフィールドワークの聞き取り調査にもとづき、ジンの存

在を比較検討した。ついで保坂修司（日本エネルギー経済研究所中東研究センター）「ミイラ取りがミイラになる話」と題して、日本に伝来した「ヘイサラバサラ（牛黄）」や「ミイラ（木乃伊）取り」の存在から、中東・イスラーム世界に端を発する怪異なるものがどのようにして日本にまで伝来したのかを様々な文献や史資料を渉猟しながら解き明かしていった。

両者の基調発表を受けて、菊地章太（東洋大学）がヨーロッパ哲学・美学の観点からコメントを加え、三沢伸生（東洋大学）を司会に、フロアを交えてイスラーム世界の怪異なるものにかんして検討を加えていった。

もとより本試みで結論に至ることが目的ではなく、今後の日本の中東・イスラーム研究において本テーマを俎上にあげることを目指したものであり、会員のみならず、数多くの一般参加を得て公開シンポジウムとしての役割を果たせた。かつて東洋大学の学祖・井上円了が明治時代に民衆啓蒙の一環として「妖怪学」を提唱して日本古来の怪異なるものの存在が検討されだしたように、イスラームの怪異にかんして今後の研究進展に期待したい。（子島進・三沢伸生）

【研究発表の会場から】

第1部会 午前の部

現代の中東・北アフリカにおける政治動向をテーマとする4本の報告がなされた。はじめに、溝渕正季氏による「選択の余地のない戦争、選択の余地のある戦争—なぜイスラエルは軍事力の行使を選ぶのか—」と題した報告がなされた。溝渕氏の報告は、まず「選択の余地のない戦争」と「選択の余地のある戦争」を区分したアメリカ外交問題評議会会長のリチャード・ハースの議論をもとに、イスラエルはなぜいくつもある選択肢の中から敢えて軍事力の行使を選択し、「選択の余地のない戦争」とは必ずしもみなしえない戦争を遂行してきたのかを問い、これに国際政治学の視点から解答を試みた。その上で、国際システム要因は主要な独立変数であるが、それを侵略的行動へと「翻訳」する鍵となる媒介変数は「政軍関係」にあるという国際政治学における仮説を取り上げ、諸理論の観点からその検証を試みた。その結果、①国際システム要因のみではイスラエルの対外行動を説明できない点、②システムからの圧力と「構造修正因子」の相互作用を分析する必要性が指摘された。

続いて、佐藤尚平氏による報告「水と油：『ブライミー陳述書』（1955年）とアラビア半島の主権」は、1950年代にイギリスとサウジアラビアの間で国境紛争の焦点となった、アラビア半島西部のオアシス地域一帯であるブライミーを事例として、水をめぐるオアシスにおける人間の暮らしと、石油採掘の前提となる排他的な領土主権との関係性について考察を行うものであった。考察の中で佐藤氏は、

イギリスとサウジアラビアがそれぞれの主張をまとめた『ブライミー陳述書』について触れつつ、国境によって区切られる領域主権という概念及び石油利権と、水に依拠した地域の人々の生活様式を対比し、両者が「水と油」のごとく相容れないものであると結論づけ、水によって結びあわされる地域において環境史の観点を踏まえた研究の可能性を提示した。およそ 10 分の休憩を挟んだ後、河村有介氏による「政治経済環境の変化と権威主義体制の生存戦略—エジプト・ムバーラク政権下における食糧補助金制度を事例として—」と題した報告がなされた。河村氏の報告は、比較政治学における権威主義体制に関する研究の動向を踏まえた上で、エジプトにおいて社会福祉制度として重要な役割を果たしてきた一方、セーフティ・ネットとしては非効率的とも指摘されてきた食糧補助金制度に着目し、2000 年代以降効率性を犠牲にしつつ制度拡充を図ったムバーラク政権の選択について検証を行うものであった。河村氏はその理由を、①人口増加に見合うだけの経済成長が見込めず、経済成長に伴う国民所得の向上によって社会保障対象者が減少する見込みはなかったこと、②サーダート政権下での食糧補助金削減に対する抗議以来、食糧補助金制度をより効率的なセーフティ・ネットへと改編する努力は、国民に対して痛みを強いることになるため封印されてきたという点に求め、そのような制約からムバーラク政権は食糧価格の高騰を抑えるために非効率的な制度変更を余儀なくされたと結論づけた。セッション最後の白谷望氏による報告『「上からの改革」後のモロッコにおける権力構造の再検討—2011 年国民議会選挙の分析を中心に—』は、2011 年に行われたモロッコ国民議会選挙の分析を通じて、アラブ革命以降政変の波が押し寄せた同国における権力構造を検証し、取り分けて同議会選挙におけるイスラーム主義政党の勝利がモロッコの政治構造にどのような変化をもたらしたのかを明らかにするものであった。白谷氏によると、2011 年 11 月 23 日に実施された国民議会選挙では、1997 年の合法化以来最大野党であった公正開発党が 395 議席中 107 議席を獲得して第一党となり、イスラーム主義政党が大きく躍進を遂げた反面、その背景にはアラブ政変を皮切りとする憲法改正や国民議会選挙の前倒しなど、ムハンマド 6 世国王主導の「上からの改革」による公正開発党に対する取り込みがあったという。

2 日目の午前の部ということで客足が心配されたものの、昨今の中東・北アフリカにおけるアラブ革命の動向を反映してか、いずれの報告も多く聴衆の参加に恵まれ、活発な質疑が行われた。

(平野淳一)

午後の部

第 1 部会午後の部は、現代アラブを取り扱うディミタル・ディミトロフ氏「Football in the Countries of Arabian Peninsula」、千葉悠志氏「アラブ諸国におけるメディアシティの競合・補完関係」そして常陸民生氏「パレスチナ・ジュリコ農

産加工団地プロジェクトの展望」の三つの研究からなる予定であったが、常陸氏の報告は都合によりキャンセルとなった。また、最初の報告者であったディミトロフ氏が列車遅延のため定刻に参加することができず、急遽ディミトロフ氏の報告を常陸氏の時間枠へ報告時間を変更する運びとなった。このように些か波乱含みの開始となったが、両報告とも報告時間を超過することなく、質疑応答も活発に行われ、最終的には成功したセッションであったといえよう。なお筆者は現代アラブを専門としないため、内容についての論評は差し控える。次回大会では緊急連絡先の周知が必要だと感じたことのみ記しておきたい。（小笠原弘幸）

第2部会 午前の部

このセッションでは、パレスチナ・イスラエルとその周辺の研究発表が相次いだ。金城美幸氏の発表「イスラエルにおけるシオニズム的歴史認識の構築—ベン＝ツィオン・ディヌールの役割を中心に」は、おそらく日本の研究者にはこれまでほとんど取り上げられることのなかったディヌールの、科学とイデオロギーを併存させた独特のシオニズム的歴史観と、彼がイスラエルにおける歴史研究において果たした役割を紹介するものであった。また、科学とイデオロギーの切り離しを掲げてディヌールを批判した、ポスト・シオニズムの「新しい歴史家」たちの見解も紹介し、シオニズム的歴史学史をパレスチナ・イスラエル紛争の文脈のなかでとらえる重要性を指摘した。続く今野泰三氏の「宗教シオニストの多様化とフロンティアへの植民事業の展開—「ユダヤ的な場所」の生産と対国家関係の変容—」は、世俗派と宗教派が混住する入植運動をめざす宗教シオニスト団体、「律法の種子」の活動を追ったフィールドワークに基づく発表である。入植活動を取り巻く状況や社会情勢、宗教シオニスト内部での世代交代にともなう方向性の変化などを示すインタビュー内容を紹介し、宗教シオニストの多様化にともなうローカリティーの創出を論じた。また、その多様化の背景にあるロジック分析の試論も展開した。三番目の発表者、今井宏平氏は「トルコとイスラエルの関係悪化に対するトルコ系ユダヤ人の対応—シャローム紙とハス・テュルク紙の分析を中心に」と題し、2008年末から2010年5月末にかけて両国間に起こった事件と関係悪化に際して、両国に在住するトルコ系ユダヤ人の反応を、双方のトルコ語メディア分析から概観した。双方の見解はかなり異なっており、発表者はその違いをトルコ・ナショナリズムと社会構造の変化と、トルコに住むユダヤ人の公正発展党との共生関係から生まれたと仮定し、論証をこころみた。

午前の部最後の発表は、鈴木啓之氏による「パレスチナ被占領地における「市民的抵抗」の発展—インティファーダの背景へのアプローチ—」である。1972年の地方議会選挙から、パレスチナ被占領地における政治活動の流れを追い、なぜ

占領開始から 20 年を経て、インティファダが起こったのかという問いへの答えを求めようとするところみであった。発表者は反キャンプ・デーヴィッド合意を掲げる「指導委員会」設立を経て、被占領地で PLO 主導による政治活動が展開され、指導者たちがイスラエル政府によって相次いで摘発されたことを受けて、80 年代から蜂起が頻発していた事実をあきらかにした。報告者はすべて若手研究者であり、いずれも現在進行形で取り組んでいる研究を紹介する内容であった。参加者からは、積極的な助言やコメントが数多く出されたが、なかには内容がやや浅薄であるという批判もみられた。ただし、今回の内容は発表者みずから「試論」と銘打つもので占められていたので、現段階でそのような評価を下すべきではないだろう。今後の展開が期待される。

(菅瀬晶子)

午後の部

このセッションでは、「アラブ」及び「イスラーム」の文学に関する 2 本の発表が行われた。平貫多朗氏は「アラブ文学史における小説の位置づけ—高校における国語教科書分析を事例に—」と題して、1950 年代以降のエジプトの高校普通科で使用された国語教科書の「文学とテキスト」の部分进行分析し、国語教育における文学史を整理した上で、文学史における小説の位置づけについて報告した。その結果、1960 年代以降に「写実主義」が文学史のための基準となっていることを明らかにした。会場からは、詩・伝記・小説などの分野がある中での小説全体の位置づけに関する質問や他のジャンルとの比較の必要性が指摘された。一方、外山健二氏は「ハーマン・メルヴィルとイスラーム」と題して、19 世紀アメリカの作家メルヴィルの著作である『白鯨』、『クラレル』などの記述からイスラームに関する部分を検証し、彼のイスラームに対する理解とキリスト教世界への懐疑、また東地中海訪問後の彼のムスリム像に関する指摘がなされた。会場からは、イスラームだけでなくユダヤ教やキリスト教に対する対抗があったのではないかと、また東地中海訪問前のメルヴィルはオリエンタルのイメージとイスラームが一致していたのではないかと、などの質問がなされた。本部会で多少残念であったのは、他の部会と比較して出席者が少なかった点である。いずれも意欲的で示唆に富む内容であっただけに、文学のみならず多くの分野の研究者に聞いてほしかった。今後のこの分野での研究の進展と関心の広がりを期待したい。

(柴山滋)

第 3 部会 午前の部

このセッションでは、中東・イスラーム経済に関する 4 本の報告が行われた。1 番目の福島康博会員による「イスラーム銀行におけるシャリーア・ボードとメンバーシップ—マレーシアの事例を中心に—」は、イスラーム金融の世界的拠点の 1 つのであるマレーシアのイスラーム銀行において、金融商品や日々の業務のイ

スラーム性を審査するシャリーア・ボードのメンバーシップの実態を解明した報告であった。報告では、同国のイスラーム銀行におけるシャリーア・ボードは、中央銀行が定めるガイドラインにしたがって、運営や活動が行われていることが紹介された後、各イスラーム銀行のシャリーア・ボードの委員を務める人物は、近代的な高等教育を受け、大学院でイスラーム法学や経済学などの博士号を取得し大学等の研究者となった者が多いことが指摘された。従来のイスラーム金融研究ではあまり検討されてこなかったイスラーム金融の実践の担い手についてメスを入れた本報告は、今後の多様な比較研究（他国・他のイスラーム経済産業）の可能性を予感させるものであった。2 番目の黒宮貴義会員による『『オランダ病』の発生の条件：エジプト、サウジアラビアの 1970 年代から 1980 年代、2000 年代の二つの時期の比較から』は、中東の上記 2 カ国および 2 つの時期を対象として、いわゆる「オランダ病」の具体的兆候とされる、1) 貿易財部門の低成長、2) 為替レート増加、3) 貿易財の輸出の停滞・輸入の増加が見られたのかを分析し、その背景的要因を考察する報告であった。報告では、両時期の両国とも、オランダ病が発生する前提である急激な資源ブームがあったにもかかわらず、1970～80 年代には両国で観察されたオランダ病の兆候が、2000 年代には両国とも観察されなかったことが明らかにされた。その要因として、政府支出の抑制、対内直接投資の促進、民間部門の発展などが挙げられた。本報告が対象とした 2 つの時期は、ともに原油価格が高騰した時期であり、従来は「中東経済特殊論」の下で同じ枠組みで検討されることが多かったが、両時期の違いを、実証データを用いて説明したことは大きな意義があるように思われた。3 番目の今井静会員による「ヨルダンにおける自由化政策と地方経済の変容」は、2000 年代にヨルダンにおいて推進された自由化政策がもたらした効果について、ヨルダン南部の地方経済に焦点を当てて考察したものであった。報告では、2000 年代に実施された様々な自由化政策によって、ヨルダン南部における失業率や就業構造、世帯年収がどのように変化したのかを、具体的な実証データを用いて分析が行われた。それらの分析より、ヨルダン南部では、自由化政策によって雇用における格差は是正されつつあるものの、世帯年収では首都アンマンとの差は縮まっていないことが明らかになった。また、ヨルダン南部の経済構造の特徴として、公的部門の拡大という自由化政策の目論みとは逆の事態が進行していることが指摘された。ヨルダン南部は、今後のヨルダン経済の経済成長にとって鍵となる地域でもあり、今後の動向が注目されているが、その地域における現状および問題点を明快に指摘した本報告は、今後の同国経済を対象とした研究の礎になりうるものだと感じた。4 番目の川村藍会員による「アラブ首長国連邦（UAE）におけるイスラーム銀行の展開と法制度の実態」は、同国のイスラーム金融における民事紛争が、どのような手

続きによって解決が図られているのかを事例を用いながら解明したものであった。報告では、UAEにおける民事紛争処理制度を概観した後、イスラーム法との適合性を重視するイスラーム金融において、民事紛争もイスラーム的に望ましい方法で処理すべきとの声の高まりに伴って、近年、UAEでもイスラーム金融に特化した紛争処理の方法が採用され始めていることが紹介された。報告内では、2つのプロトタイプとなる事例が紹介され、いずれも、イスラーム法を考慮に入れる特別司法委員会によって紛争処理が進められていることが明らかになった。イスラーム金融が関わる民事紛争をイスラーム的に解決すべきとの声は、UAEだけでなく全世界で高まっているが、具体的な解決方法を定めている国はまだ非常に少ない。その意味においても、本報告は数少ない先駆的事例を取り扱ったものであり、今後の同種の研究における貴重な凡例を示したものと言えるだろう。(長岡慎介) 午後の部

このセッションでは2発表が行われた。アブラル・アブドアルマナン・バル氏の発表「サウジアラビア王国における女子大の国際化」では、サウジアラビアの私立女子大学エファット大学における大学側の国際化への取り組みについて、大学へのインタビュー調査をもとに報告がなされた。質疑応答では、サウジアラビアでの女性に対する職業教育の現況や、卒業後の女子学生の就業状況、サウジアラビアの男子高等教育と女子高等教育との差異、について質問がなされた。

小島宏氏の発表「東アジアのムスリム移動者におけるハラール食品消費行動の規定要因」においては、店田廣文氏による「在日ムスリム調査(2005-2006)」と李熙秀氏による「在日韓国ムスリム調査(2010)」の個票データにロジット分析の手法を適用した分析結果にもとづいて、在日・在韓ムスリムのハラール食品の利用を規定する社会要因(就業での地位、学歴、婚姻、年齢、出身国、入国年度など)についての考察が行われた。質疑応答では、ハラール食品の定義方法や、ムスリム移動者の出身国食品への嗜好傾向について質問が出され、討議が行われた。(尾崎貴久子)

第4部会 午前の部

この部会は、過去数年の大会でも何度か設定されている、日本と中東・イスラーム世界との関係に関する報告を集めたセッションであり、今回は4つの報告がおこなわれた。

このうち、店田廣文氏・岡井宏文氏・石川基樹氏の報告(第1~第3報告)は、早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室が3年前から取り組んできた「滞日ムスリム移民と日本側地域社会との関係性」についての調査研究の最新成果で、2010年度大会(第4部会)における同じ三氏の報告のいわば続篇をなす。前回の

報告は、地方中核都市だが、ムスリム系の外国人移民は最近になって増え始めたばかりの、岐阜県岐阜市での調査にもとづくものであったのに対し、今回の三報告は、外国人が相対的に多く、すでに（主にパキスタン系の）確固たるムスリム・コミュニティも存在する一方、保守的かつまとまりの強い地域社会もなお健在な富山県の小都市、射水市での調査結果にもとづいたものである。3 報告全体の総論にあたる店田氏の第一報告は、まず、日本において多様な国籍集団からなるムスリム・コミュニティが急速に形成されつつある現状を、モスクの急増や各種エスニック・ビジネスの発展にも言及しながら概観し、次に、自治体当局も含めて、各地の地域社会がいまだムスリムとの相互理解と関係構築に十分な認識を持ちえていない点を指摘したのち、岐阜・射水両市でおこなった調査の概要と、欧米の関連研究、および射水市のムスリム移民の概況を紹介した。そのうえで、調査結果の集計から、①射水市の地域社会の対ムスリム意識は、多くの質問項目において、他の外国人への意識と比べてもはっきりとネガティブな傾向に偏っている点、②地域の人々とムスリムとの直接交流がきわめて限られている点、③年齢に起因する統計上有意な差異あまり見られない点などを示した。続く岡田氏の第二報告は、調査票の質問項目の中の「イスラム教／ムスリムと聞いて思い浮かべること」を三つずつ自由に書いてもらう項目の回答にテキストマイニングの手法を用いて、射水市の人々のイスラーム・イメージの構成概念を抽出し、①否定的見解が多いものの〈一般的知識〉も観察しうる点、②地域特有の「パキスタン」の概念が顕著に現れている点、③男女間・年齢層間の傾向の違いなどを明らかにした。さらに、構成概念の間の対応分析も試み、五つのクラスター——「一般的知識」「否定的見解 - 具体」「否定的見解 - 抽象」「漠然・曖昧」「特定経験」——が〈抽象 - 具体〉と〈経験的／物理的距離の遠一近〉の二つの軸に沿って分布している構造を描き出した。また、報告の末尾で岡田氏は、地域社会側の認識には「外国人一般」ないし個々の「〇〇人」（「パキスタン人」など）と区別された「ムスリム」というカテゴリーが明確化されておらず、それは今後、墓地や教育などのライフサイクル関連の課題が顕在化した際に必ず問題になる、と論じ、イメージの作られ方自体をより詳しく見ていくことの必要性を強調した。石川氏の第三報告は、岐阜市・射水市双方の調査データに統計学的解析を加えて、地域社会のイスラームへの認識／ムスリムへの態度のあり方が何によって規定されているのかを記述・検証するための構造方程式モデルを提示した。モデルは〈イスラーム認識〉ならびに〈相互理解への積極性〉と〈イスラームへの受容態度〉との因果連関を骨格とし、そこにさまざまな属性変数を投入して有意性を測る構造となっており、作業仮説をもとにいくつかの社会経済的属性変数などを投入した結果、年齢・職業・世帯収入に関しては有意性が得られず、性別・学歴・外国人との交流の場に関しては、

岐阜市調査では有意性が得られたが、射水市調査では得られなかった。ここから石川氏は「受容性は女性のほうが高い」「外国人との接触や交流が外国人に対する寛容性を増加させる」(接触仮説)などの先行研究の知見は再検討の必要があると結論づけた。これら3報告をめぐっては、会場より多くの質疑が出され、活発な討論が展開された。質問内容は、調査地選定の理由、調査の方法論、調査項目の問題点、射水市のムスリム・コミュニティの特質など多岐にわたった。討論を通じて、①質問項目の「曖昧性」は質問者の側がイスラーム・イメージを構築してしまうのを避けるための戦略であること、②調査票は現地の自治会長らとの対話を踏まえて作成されたこと、③射水市のムスリム・コミュニティは、国籍・エスニシティ上の分断化・分節化をはらみつつも(とりわけ中古車業に携わる)パキスタン人が中心であって、ウルドゥー語が使われていること、④モスクを中心とした集住形態ではなく、射水市外も含めた散居形態を取っていること、⑤ムスリム側の地域社会に参加しようとする志向は弱いこと、などが追加的に示されたほか、①他の外国人コミュニティとの関係の分析、②〈地域の教育とイスラーム〉の問題の検討、③明確な肯定・否定ではない「中立的態度」の検証、④これまでの郵送形式の質問紙調査とリンクさせた対面調査の実施といった、プロジェクトのさらなる課題も浮き彫りになった。

重親知佐子氏の第四報告は、戦時期に大日本回教協会の初代会長となった陸軍大将林銑十郎(元首相)の著述・発言を出発点にして、当時の「回教対策」／「回教工作」に深くかかわった軍人・活動家らの思想的系譜をたどり、その原点の一つが、林が復興させ社長を務めた「大日本国教大道社」の創始者、川合清丸の思想にあることを掘り起こしたものである。思想戦の一環としての宗教工作を重視した林銑十郎は、アジア諸地域の宗教をそれぞれに振興して結びつけることで、欧米列強に対抗するための精神的団結を生み出せると考え、また、イスラームと神道との「共通性」をムスリムと日本との「融和提携」の基盤に据えようと図ったが、重親氏は、こうした林の思想は、キリスト教の「蔓延」に対する危機感から出発して、仏教・儒教・神道三教の「並行・協働」を説き、陸軍の軍人に多くの信奉者を得た川合清丸の「大道教」の継承・発展にほかならない、と論じた。重親氏の報告をめぐって、会場からは、こうした思想的系譜の中に「天皇制」の問題はどう位置づけられるのか、という問題提起がなされた。(安藤潤一郎) 午後の部

このセッションでは現代エジプトに関する3つの報告がなされ、いずれの報告においても活発な質疑応答がおこなわれた。竹村報告「都市発展の三様式論の再考 エジプト西部デルタの沙漠開拓地、ベヘイラ県バドル市を事例として」は、現地調査したエジプトのベヘイラ県に位置するバドル市という一地方都市を事例

として提示することによって、カイロの都市発展を分析したシムズの三様式論が抱える問題点をあぶりだし、その代替となるモデルを提起しようとする試みであった。報告ではシムズの議論の整理にいささか時間がかかったものの、バドル市調査の事例について丁寧な分析がおこなわれ、現代エジプトの地方都市に関する研究の深化の可能性を感じさせるものであった。後藤報告「二つの裁判のあいだエジプトにおける憲法第二条の实践と「シャリーア」」は、ムスリム女性のヴェール着用に関わる二つの裁判の判決文を事例として、イスラームを国家の宗教となしシャリーアを立法の主たる源泉とするとしたエジプト憲法第二条の实践と「シャリーア」の理解について論じた。エジプトの二つの大学が規定した構内でのニカーブ着用禁止についてその廃止を求めた訴えに対し高等行政裁判所が出した判決はいずれも、ニカーブ着用がシャリーアの範囲内でありその実践を大学側が妨げることは憲法で保障された「個人の自由」や「信仰の自由」を侵害するものであるとしたが、後藤はこのような判決の根拠には「シャリーア」の理解の相違が確認されると指摘して、現代エジプト司法行政の一端を的確にまとめた。鳥山報告「2000年代を生きるカイロの「若者」の生：近代をキーワードに差異を紡ぐ」は、エジプトの「若者」（学校教育を終えた未婚の20-30代前半の男女）を対象に、ライフ・ヒストリーの手法によって、現代エジプトの「若者」を捉えようとした。シャイマというエジプトの「若者」に属する女性の聞きとりから、現代エジプト社会において特権的な場としての「コッレイヤ」を卒業し、その努力の結果として「クバール」になったにもかかわらず、現実の社会ではいまだに自らが望む職業や地位につけていないことへの不満を吐露するシャイマがまさに現代エジプトの「若者」の一つの姿であることを活写した。具体的な事例が多く提示された報告は説得力のあるものであった。（栗山保之）

第5部会 午前の部

第5部会午前中には4本の発表が行われた。

第1発表は、遠藤春香氏の「シャアラーニーの聖者論—『完全なる者』の理論を中心に」であった。16世紀のエジプトに生きたシャアラーニーは、すぐれた法学者である一方で、イブン・アラビーの教えを受け継ぐ穏健派のスーフイーとしても知られている。遠藤氏は、シャアラーニーによる聖者論のうち、従来の研究が注目してきた「苦難を引き受ける聖者」の先にある、「知によって共同体を導く聖者」に関する議論に注意を喚起し、「完全なる者」をめぐる理論を検討することで、当時の社会不安、スーフィズムと法学内部の混乱、両者の対立といった時代背景が、シャアラーニーの思想に深く結びついていることを示した。よく整理された手際のよい発表によって、時代と結びついたシャアラーニーの思想がスーフ

イズムと法学にまたがった全体像として理解される充実した発表であった。

次いで高橋圭氏が「近代エジプトにおける知的交流の場—東洋連盟の事例から」と題する発表を行った。氏はこれまで、近代エジプトのタリーカ統制をめぐり優れた論考を著しており、それらの著作中で、タリーカ統制の責任者であり、独自のタリーカ近代化を模索したバクリー家のシャイフに注目してきた。東洋連盟もまた、1922年設立時の代表は当時のバクリー家シャイフであるが、この団体には宗教も政治的主義主張も様々な知識人が参加しているという。東洋連盟に関する先行研究は少なく、高橋氏の研究もさらなる史料の発掘が期待される段階ではあったが、英国支配から脱しようとする時期のエジプトの思想運動潮流の一つとしてだけではなく、タリーカの近代化がそうした宗教を超えた活動と結びついていたこととの関連からも興味深い発表であった。加えて近代エジプトにおけるサロン（マジュリス）の伝統との連続性の指摘も重要な観点として納得された。

第3発表は、安田慎氏が「シリア・シーア派参詣地における法学者の活動と役割」と題して行った。氏はシリアの宗教観光産業を研究しており、今回はシーア派に人気のある参詣地で、2000年以降に次々と事務所を築き、参詣者向けのサービスや講演会、追悼会主催など多彩な活動を展開するシーア派法学者たちに目を向け、それらの活動が、イランなど法学者の出身国において、法学者のヒエラルキーを上昇していくために利用されているとの結論を導いた。限られた時間で結論に説得力を持たせるには、取り上げる事例を絞り込むなどの工夫があればさらにわかりやすくなったとの印象もあるが、詳細な資料の提示は丹念な現地調査の様子をうかがわせ、多角的視点からの議論からは、安田氏の目配りのよさも感じられる好発表であった。

第4発表は塩崎悠輝氏による「アフマド・ファターニーのファトワー集—19世紀末から20世紀初めにかけてのマッカと東南アジアの関係」であった。氏は、タイ南部出身の法学者アフマド・ファターニー（1856-1908）の事績を紹介し、メッカに移住した東南アジアのムスリムが、そこでシャーフイー派の知を継承するとともに、出身地の政治状況に左右されずにファトワーを示していたことを明らかにした。この状況は、中東における東南アジア出身ムスリムの拠点がカイロへと移り、出身地ではファトワー管理制度が確立されることで失われていったという。塩崎氏の言う「対抗的公共圏」としてのメッカという発想には大きな関心を引かれるが、氏の言うとおりファターニーのファトワーが実際には適用困難であったならば、公共圏としての意味合いについてはさらなる検討が必要であろう。

全体としては発表時間が遵守され、質疑応答も活発であって、落ち着いた雰囲気の中にも充実した部会となったことに、座長として発表者、聴取者、補助者各位に感謝したい。

（赤堀雅幸）

午後の部

フランス保護領時代のチュニジアでは、ニザーラという教育監督機関が、ウラマーの学位を認証し、彼らの思想・運動を監視していた。若桑遼会員による報告「ターヒル・ハッダードの思想を弾圧したもの：『シャリーアと社会における我々の女性』(1930年)の筆禍事件の検討」は、改革的法学者のターヒル・ハッダードが、著書『シャリーアと社会における我々の女性』の中で男女の社会的平等の合法性を説いたことに対して、ニザーラとの対立をめぐる論争を分析した。この分析は、国家とイスラーム、ウラマーの関係が大きく変わり、自由主義や新聞といった、西洋起源の思想・メディアが導入された時代における、ムスリム言論・宗教界のあり方を考察する上で重要な事例研究と評価され、聴衆との間で、同じフランスの統治下にあったアルジェリアにおけるウラマー統制との移動などが議論された。

神の恵みを意味するバラカという言葉は、「民衆イスラーム」の鍵概念として重視され、主に聖者崇敬との関連で研究されてきた。しかし、バラカという言葉は、聖者崇敬の場面でのみ使われるわけではなく、日常の様々な恵みに対しても広く用いられる。二ツ山達郎会員による報告「モノを通して具現されるバラカの一考察：チュニジアにおけるオリーブの事例から」では、現代のチュニジアにおけるオリーブをめぐるバラカの用法を分析し、バラカを聖者崇敬よりも広い社会的・文化的文脈から考察した。バラカに対する新たなアプローチは、聴衆の興味関心を刺激し、様々な恵みを全てバラカとして均一に分析するのではなく、バラカを多面的・総合的に理解していくために、分析概念としてのバラカの適切な再定義が重要ではないかなどのコメントが寄せられた。

丸山大介会員による報告「マウリドにおけるタリーカ・タサウウフ表象：スーダン・ハルツームにおける預言者聖誕祭を事例として」は、ハルツームにおいて、マウリド（預言者聖誕祭）に参加するスーフィーが、タサウウフやマウリドをビドアとして批判するサラフィー主義者との衝突の中で形成する自己言及を分析することで、サラフィー主義を非寛容で過激な思想・運動と非難し、タサウウフの寛容さを強調するスーフィーの対抗的な自己表象とその政治的・社会的背景を考察した。タサウウフの正統性をめぐる論争は古くから続いてきたが、この報告は、現代スーダンの社会・政治状況下での論争の具体的諸相を浮き彫りにした点で興味深いものであった。また、寛容さを主張しながらサラフィー主義を非寛容として排除するスーフィーの論理の矛盾も関心を喚起し、活発な質疑が行われた。

(森山央郎)

第6部会 午前の部

小笠原弘幸氏「古典期オスマン帝国における『系譜書』」は、16 世紀以降、盛んに作成された『系譜書（スィルスィレナーメ）』について、その形態や内容の特徴を整理しつつ、系譜の表現にパノラマ的描写や細密画といった視覚的アプローチが多用されている点を指摘した。その上で『系譜書』のこうした特徴と当時の系譜意識との関係についても言及した。質疑応答では、『系譜書』に記された具体的な文字情報とその重要性に関する質問のほか、同時期に作成され、多くの細密画が収載された『祝祭の書』との関連性に関する質問が出された。午前中最初の発表であったにも拘らず会場は非常に盛況であった。齊藤優子氏「コレラの発生と検疫所の設置から見るオスマン帝国の公衆衛生改革—ルメリ鉄道沿線を事例として—」は、19 世紀のオスマン帝国におけるコレラの流行と検疫制度の問題について、従来、シリアやヒジャーズ地方などに比してあまり注目されてこなかったルメリ鉄道沿線地域における実態を検討した。とくに公衆衛生組織の改革、エディルネ州でのコレラ対策、コレラ対策の変化といった問題を中心に、文書史料に基づく具体的かつ詳細な実態が報告された。質疑応答では、第 3 回コンスタンティノーブル国際衛生会議が 1866 年に開催された背景について質問が出された。幸加木文氏「トルコ性概念からみたトルコ・イスラームの歴史的展開」は、詩人・作家であるイスメト・オゼルの言説を分析し、フェトウッラー・ギュレンとその関連団体の主張と比較することで、現代トルコにおける宗教やアイデンティティの問題を検討した。とりわけオゼルの「トルコ性」やテュルク像について、彼の言説に基づく分析過程・結果が丁寧に示され、その特徴としてイスラームの不可分性などが指摘された。質疑応答では 20 世紀後半の思想・言論活動に関する質問が出された。伊藤寛了氏「1940 年代のトルコにおける宗教的言論活動と政府の統制」は、第二次世界大戦後のトルコで活発化した宗教的言論活動に対する政府の統制について、首相府出版放送総局と宗務庁による統制の具体的事例をもとに検討した。結論では、従来看過される傾向にあった宗務庁の役割の重要性を指摘し、宗教的言論活動に固有の統制のあり方や世俗主義（ラーイクリキ）との関わりにも言及した。質疑応答では、報告冒頭で説明のあった 20 世紀初頭の社会状況などをめぐって議論がなされた。（藤木健二）

午後の部

この部会ではオスマン帝国およびトルコ共和国に関連する 3 報告がおこなわれた。一つ目の藤波信嘉「パヴロ・カロリディのオスマン近代」は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、オスマン帝国およびギリシア王国で活動した歴史家・政治家パヴロ・カロリディの思想と行動を取り上げ、トルコにもギリシアにも収斂しない「オスマン秩序」が成立しうる可能性を論じた。質疑でも指摘されたとおり、その特異な思想の紹介には成功しているものの、その反響に関する実証作業には

なお課題を残す。二つ目の宮下陽子「1960年代後半から70年代前半にかけてのトルコ労働組合連合 (Türk İş)-CHP (共和人民党) 関係」は、同時期のトルコ共和国における労働組合と政党との関係を、「トルコ労働組合連合」と「共和人民党」とのかかわりを軸にして分析した。政治学的視点と現代史的視点を織り交ぜた手法を用いて論証を試みる点は評価できるものの、専門的な議論に終始し、扱うテーマの重要性に比して議論に広がりがないという印象を受けた。三つ目の岩坂将充「トルコにおける司法と軍—憲法裁判所と「体制」維持の観点から」は、1961年以降のトルコ共和国における「憲法裁判所」の機能に注目して司法と軍との関係を通観した。「体制」の擁護者を自任する軍との距離を測りながら司法の独立を確保しようとする「憲法裁判所」の立場の変遷が明瞭に整理されており、時間の制約に押されて報告の後半が駆け足になってしまったことがたいへん惜まれる。

いずれの報告も、新たな研究対象、新たな研究視角を提示して議論を組み立てようとする意欲的なものばかりであったが、先行研究や報告テーマにかかわる基本情報を丁寧に整理することで、議論の「新しさ」や「独自性」を際立たせる工夫が求められよう。(佐々木紳)

第7部会 午前の部

鎌田由美子氏は、絨毯研究において十分に解明されてこなかったインド南部のデカン産絨毯に焦点をあて、「17-18世紀のデカン地方における絨毯生産：デカン美術の観点から」について研究報告を行った。デカン産絨毯は、16世紀頃ペルシアからの移民によって開始されたとされ、ペルシア絨毯のデザイン・モチーフの影響を色濃く受けているが、「迷路」のデザインなどデカン特有のデザインをみられる。17世紀後半以降、手頃な価格のデカン産絨毯は、イギリスやオランダの東インド会社などによって貿易品として開発され、世界各地に流通した。鎌田氏によって、オランダ絵画におけるデカン産絨毯の描写の例や、京都や長浜の豪商の手に渡ったデカン産とみられる絨毯の例が紹介された。質疑応答の中で、インドからオスマン帝国に、綿製品や宝飾品など多くのインド製品が輸出されたことが判明しており、トルコに残る絨毯の由来の分析の必要性が提案された。続いて、小澤一郎氏によって、「19世紀後半における西ヨーロッパ諸国からガーજャール朝への武器供与：1890年のイギリスによる弾薬筒供与の分析を通じて」について報告がなされた。イギリスからイランへの弾薬筒供与は、19世紀前半には利益を度外視した政治的な目的を持っていたのに対し、1890年には、製造・流通ともに民間企業が中心的な役割を果たすようになった点が指摘された。それは、19世紀後半の兵器関連技術の発展を含む技術革命と、ロンドンとペルシア湾を結ぶ英領インド汽船会社の運行に見られる民間汽船会社の勃興などの交通革命に伴う世界

全体の流れを背景としていたとされる。当時のガージャール朝ペルシア領内のイギリス領事館の役割や民間企業の中東進出に対するイギリス政府の対応など、大英帝国の対外政策という大きな枠組みの中で「武器供与」を位置づけると、本研究の意義がより明確になると考えられ、今後の研究の進展が期待される。最後に、稲山円氏が、「テヘランにおける女性の宗教実践：女性宗教職能者の役割と位置づけから」と題した研究報告を行った。テヘラン北西部の新興住宅地でのフィールド調査の結果、女性宗教職能者の人気は、必ずしも正規のイスラーム教育の有無を反映しておらず、敬虔さや人柄、美声や語りの巧みさ、人生経験、病気治癒や願掛け成就の仲介といった要素が重要性を占めていることを稲山氏は明らかにした。本報告は、イラン・イスラーム共和国政府は「正しい」イスラームの普及を目的として女性のイスラーム教育を奨励してきたが、国家の意図と女性の実践にズレがあることを浮き彫りにした興味深い発表であった。報告後、こうしたズレを政府が看過している理由、女性宗教職能者及び宗教集会に参加している女性たちの社会経済的な背景や、女性たちの宗教行為へのメディアの役割などを明らかにすべきであるという指摘がなされ、活発な議論が展開された。（貫井万里）

午後の部

富永正人氏は、日本人の外国語の習得という観点から、コミュニケーション能力を重視した TUFS 言語モジュールを用いた、日本人に対するアラビア語教育の試みについて報告が行われた。従来の語学教育法、アラビア語初級文法書、基礎単語などの比較を通して得られたデータを基にした、モジュールの作成過程を紹介した。実際にインターネット上で見られるモジュールを提示して、具体的な使用法が示されたが、学習者に対する使いやすさへの疑問など語学教育の実務的な質問がなされた。しかし、このモジュールは開発段階にあり、今後の発展に期待が持たれる。竹田敏之氏は、現行のアラブ各国で使用されるアラビア語学習辞書を基に、近代以降の辞書編纂の背景や各国での地域差について報告が行われた。近代化の中での現代アラビア語の成立状況をふまえて、各国の辞書編纂の母体となったアラビア語アカデミーの成立、編纂活動について解説した。また、チュニジアの『ジャディード』を中心軸に、エジプトの『ワスイート』、シリアの『マドラスィー』の各辞書における採録単語について、道具名詞を中心に比較をおこない、特に近代以降に導入された新語の語彙採用傾向、その地域差について明らかとし、現代アラビア語の多様な側面を示した。会場からは、欧米のアラビア語辞書との比較や、道具名詞以外での単語の採用傾向などについて活発な議論が行われた。

（吉村武典）

第 8 部会 Session 8

Prof. Chang-mo CHOI (Könkuk University): “Reflection on Arabia-Africa in the Mappa Mundi of Chosŏn Dynasty: A Study Based on the *Honil kangni yŏktae kukto chido* or The Unified Map of Territories and Capitals of the States of 1402”

Prof. Chong Jin OH (Hankuk University of Foreign Studies): “Creating Cultural Cooperation in Eurasia through Historical Heritage: Turkic-Altaic Cooperation in Eurasia”

Prof. Byung-Ock CHANG (Hankuk University of Foreign Studies): “Recent Nuclear Crisis in Iran and North Korea”

本セッションは、韓国中東学会からの参加者によるもので、いずれも韓国を中心にした東アジアと中東との関係について、対象とする時代は異なるが文化や政治など様々な側面からの考察を示す興味深い報告がなされた。朝一番の英語によるセッションであり、参加者の少なさが心配されたが、30 名近くが参加し、活発な議論が行なわれた。

CHOI 教授の報告は、李氏朝鮮王朝時代の東アジア最古の世界地図（太祖の命により 1402 年作成）のデジタル画像を詳細に分析したものであり、中国や日本とは異なる前近代の韓国の外部世界認識の一端が示され興味深い内容であった。とくに、アフリカやアラビア半島地域に焦点を絞り、地図に記載された地名と現地名との同定に関して既存の学説を批判された。地名の漢字の発音に関する質問に対しては、中国と韓国での発音の時代的なズレなどについて説明がなされた。

CHONG 教授は、韓国＝中央アジア関係の今後の発展に関する提案を含む政治・文化的分析について報告された。日本も含むユーラシアの東西全域における経済を中心にした関係発展のためには、テュルク系諸民族の交流など歴史的な背景を背景にした文化的な協力関係の構築が必要であるとして、トルコ・日本・韓国を中心にした制度的な枠組み作り（TIKA=JICA=KOICA）についても説明があった。ロシアや中国との関係についての質問には ASEAN+3 などの例が参考になるとの答えがあった。パントゥーラニズム的な構想の再版ではないか、あるいは現在の若い日本人・韓国人の歴史的知識を考えると現実性はあるか、などのコメントもなされた。

CHANG 教授は、韓国におけるイラン問題の権威であるが、イランと北朝鮮の核問題を比較する明快な内容の報告をなされた。結論として、北朝鮮が韓国からの援助を引き出すために核兵器装備を目指すことを明言し、プルトニウム製造に重点を置いているのに対し、イランは NPT の枠組を守り、平和利用のためとしてウラン濃縮を行なっている。しかし、いずれも現体制の維持のために核開発をしているという点では共通している。ただし、北朝鮮が核開発を外交交渉の材料と

しているのに対し、イランはそれを固有の権利と主張して譲らず、問題解決はより難しいといえる。この報告に対し、イスラエルとの関係、国政テロ組織との関係、核開発技術の供与国などに関する質問がなされ、活発な討論がなされた。

(長沢栄治)

企画セッション

(1) Middle East from Korean Perspective (Special Session of KAMES)

「韓国からの視座」と題する本セッションは韓国中東学会からの報告者を迎えて、大会二日目の午後1時から行なわれた。残念ながら、本務校での急用のために二番目の報告予定だった Young-kyu JEONG (Hankuk University of Foreign Studies) “Korea Culture and cultural content industry in Iran’s future expansion strategies” に関してはキャンセルになった。

さて、本セッションはプサン外国語大学の Byoung Joo HAH・KAMES 会長のあいさつから始まった。HAH 会長もすでに来日回数からいえば常連とっていいかと思うが、何よりもまず、このような人的なつながりが KAMES との付き合いをより一層生産的なものにしていくのであろう。

最初の報告者は Jeongmin SEO (Hankuk University of Foreign Studies) の “Korea’s Changing Interests in the Arab World” であった。マンチェスター仕込みの見事な英語での報告であった。SEO 氏は韓国とアラブ湾岸諸国との関係を中心に、軍事、政治、経済など多角的な角度から分析した。近年の韓国の湾岸産油国との関係強化には目を見張るものがあるが、この報告から韓国と日本の湾岸産油国との関係を比較研究することも必要であると痛感した。しかし、それにしても対外関係における韓国と日本の政治指導者のリーダーシップの質のあまりにも大きな格差に率直なところ驚きを禁じ得なかった。

Joong-Kwan KIM (Dongguk University) “The High Tide of the Korean Wave in Middle East” の報告は、てっきり英語で行なわれるのかと思っていたら、日本語での報告となった。会場は驚きに包まれた。また KIM 氏はかつて経済畑の研究者だったのが、中東における韓流ブームについての報告であるのもテーマとして意外であった。報告におけるパフォーマンスは堂に入っており、われわれも学ぶべきことが多かった。韓流が中東にかなり入り込んでいるのはしばしば耳にするが、実際に統計に基づいて示されると、韓流ドラマや K ポップスなどに代表される隣国のソフトパワーの輸出ぶりには目をみはるばかりである。

報告者の一人が来日できなかったのも、時間前に終了する予定だったが、フロアを含めた質疑応答が予想以上に盛り上がり、結果的に1時間半の枠をほとんど使い切ったかたちになった。その意味では議論が十分にできる贅沢なセッション

ンではあったが、進行役としては時間配分に関してやはり反省をしなければならないと思っているところである。
(臼杵陽)

(2) *Iraq from dictatorship to Democracy: some problems of transformation*

本セッションは、イラクから来日中のバイト・ル＝ヒクマ（イラク学術機関）派遣団、およびバグダード大学、バスラ大学からの派遣団が参加して実施され、派遣団のうちバイト・ル＝ヒクマ会長のシュムラーン・アル＝アジュリー Shamran al-Ejli 氏、バグダード大学文学部歴史学科長のマフムード・カイスィー氏による報告が行われた。シュムラーン・アル＝アジュリー氏は“Bayt al-Hikma and its role in Iraqi culture after transformation”との演題で、イラクで最も権威ある学術機関であるバイト・ル＝ヒクマの設立経緯と活動内容、現在それが持つ意義について、報告を行った。同機関は、アッバース朝期に帝国領地をはじめとする当時のイスラーム世界各地の知識、情報を収集し、翻訳するという同名の最古の学術機関にその起源を遡ることができる。そのため、現在のバイト・ル＝ヒクマも各国の知識、情報を収集し、翻訳する事業に力を入れている。会場からは、その具体的な活動に関して質問が投げかけられた。またマフムード・カイスィー氏は“Iraqi Identity: People, State, History and Ideology, A Historical Perspective”との報告を行い、戦後のイラクにおけるアイデンティティの模索が続いていること、特にかつてのアラブ・アイデンティティが否定されそれを代替する帰属意識が醸成されていないことの問題を指摘した。なお、予定されていた Mohammad J. Ibrahim (Bayt al-Hikma) 氏の報告“Tyranny or Democracy? Two Ways towards the Modernization in Iraq”は、本人の都合により来日が実現できず、取りやめとなった。

バグダード大学歴史学科を中心とする訪日団は、過去にも数回訪日しており、積極的な日本との継続的な学術交流を強く希望している。特に、イラクの戦後復興のために日本の近代化、戦後復興の知恵・経験を活かしたいと切望しており、来日期間中、日本のさまざまな中東研究者のみならず日本史研究者と積極的に意見交換を行った。特に同大学団長であるカイスィー氏の尽力は並々ならぬものがあり、同大学歴史学科での日本研究科設立に腐心してきた経緯がある。このような学術交流は、研究大会期間中の短いセッションではあったが、極めて有意義で、今後の本学会の活動に指針を与えてくれたものと思う。（なお、イラク派遣団の訪日については、イラク側からはバイト・ル＝ヒクマ、日本側からは国際交流基金の支援があったことを追記しておく。）
(酒井啓子)

(3) *A Study of the January 25th Revolution* （1月25日革命の考察）

はじめにタハリール広場のデモに参加した二人の若いエジプト人がその政治環

境の劇的変化をどのように捉えているか、報告してもらった。Mai Muhammad Al Moatasim（2003年カイロ大学卒業生）は第一に、革命前の時期におけるエジプト政治を考察し、続いて最終的に革命につながる大衆の抗議デモの諸原因を簡潔に分析した。最後に初期において革命が比較的成功裡に展開した諸要因、チュニジア革命の影響、メディア報道、インターネット、野党勢力、イスラーム主義運動の役割などに言及した。Alaa Farouq Mahmoud Ibrahim（カイロ大学）は政治的言説、新聞、テレビ番組など様々な資料に基づき、革命の18日間が推移する中でのメディアの劇的変化、そしてメディアが政権の代弁者として元来の役割へ復帰したことなどを取り上げた。革命勃発直後メディアは旧政権支持とタハリールデモの過小評価を繰り返したが、情勢が変化すると、急に革命勢力を称賛し、前大統領を排除し始めた。富田広士は、軍による暫定統治上重大あるいは危機的な事態が発生した際に見られた、軍最高評議会、内閣、民主化勢力、旧野党、世俗主義・自由主義グループ、ムスリム同胞団、サラフィー運動などアクター間の意見交換、協力、対立を分析した。一つは「憲法諸原則」をめぐる議論（2011年6月以来継続）で見られたイスラーム勢力対世俗主義リベラル勢力の対立、アズハルがそこで果たしうる一定の和解力であり、もう一つは軍最高評議会とムスリム同胞団が決定的衝突を回避して民主政治を築く可能性である。最後に奥田敦が上記3つの報告にコメントした上で、シリア情勢との比較の視点を3つ提示した。①政権内部での軍の立場の違い、シリアでは今のところ軍が大統領・政府に圧力を行使することはありえない。②シリアではムスリム同胞団を含む反政府運動は歴史的、社会的に脆弱である。③シリアの情勢とは反対に、現在エジプトで進む新政権作りはエジプトを越え、ムスリム全体、世界全体に「民主的イスラーム」体制の示唆を与えるものである。エジプトは2012年6月30日、とにかくムスリム同胞団の大統領を選んで民政移管した。今後軍の影響力が行使される中で複雑な状況展開、新政権作りの紆余曲折が予想される。続けて若者、市民の役割に注目してゆきたい。セッション運営に関しては、各発表者の発表内容がかなり多くなったため、2時間枠でやらせていただけたらよかったというのが正直な感想である。また英語のセッションであったが、反省点として最後の質疑応答に和訳英訳を入れて日本語でも質問していただけるようにしたほうがよかった。（富田広士）

【大会を終えて】

「アラブの春」と称される一連の変革の動きによって、日本社会においても中東についての関心が高まるなか、本年度大会を迎えました。このさなか、従前より交流関係のある韓国中東学会（KAMES）、イラク人研究者など海外からの参加者の皆さんによる特別セッションにおける発表・討論も大変に熱を帯びたものと

なり、本学会の国際性が高まってきたことが実感されました。

初日（5月12日）の公開イベントでは、例年通りに開催校ゆかりの2つの主題によるシンポジウムが催されました。理事長の長島忠美理事長は2004年の新潟中越地震の被害を受けた山古志村の元村長であり、東洋大学は3・11以降に様々なボランティア活動を展開しており、第1部は子島進事務局長の企画のもと「ムスリム NGO の理念と活動」と銘打ったシンポジウムを催しました。続く第2部では啓蒙活動の一環として「妖怪学」を創始したことで著名な学祖・井上円了に因んで三沢伸生実行委員長の企画のもと「イスラームと怪異」と銘打ったシンポジウムを催しました。

また公開イベントと連動して、東洋大学アジア文化研究所主催・本学会共催でもって井上円了記念博物館において「日本人のイスラーム世界観」と銘打ち、文学・TV・映画・漫画・ゲームなど戦後の日本大衆文化のなかに描かれたイスラーム世界像についての展示企画が開催いたしました。小規模なものでありながら、多数の会員から興味深いものであると感想を頂戴して安堵いたしました。

2日目（5月13日）の研究プログラムでは、8つの部会と、特別セッションとして、前述のように韓国中東学会（KAMES）、イラク人研究者、エジプト人研究者らによる英語による3つの公募部会が組まれ、合計57本の発表が行われました。

本年度の大会も多くの方々の献身的な協力によって、事前の準備、および当日の運営が行われました。東洋大学には昨年末に文学部の後藤明会員が定年退職され、社会学部の三沢伸生実行委員長、国際地域学部の子島進事務局長という2名の専任教員という心許ない体制でしたが、非常勤講師・客員研究員を中心に組織した実行委員各位および会計担当の重責を御快諾戴いた石丸由美会員の献身的御尽力と、後藤会員の薫陶を受けてきた大学院文学研究科史学専攻大学院生およびOBによる実働部隊の働き、また臼杵陽会長・新井和広事務局長・国際交流担当の長澤榮治理事・酒井啓子理事の支援のお蔭様をもちまして、準備を進めて開催に漕ぎ着けることができました。

また本年次学会開催にあたり、東洋大学の御厚意により年次大会実行委員会に宛てて特に学会大会開催補助金30万円が付与され、これを財源としまして韓国中東学会招聘を円滑に行えましたことに感謝の意を表しつつ特記しておきます。

末筆ながら、来年度の年次大会がますますの参加者を得て、盛大に開催されますことを祈念して、所感を締めくくらせていただきます。（三沢伸生）

【年次大会の改善に向けて】

本年度大会の準備・運営において、前年度の京都大学大会事務局補佐役の長岡慎介会員作成・提供になるマニュアルによって大いに助かりました。年次大会の

準備・運営の大変さは覚悟はしていたとはいえ、次から次へと生じる予期せぬ事態に大いに翻弄されるなか、マニュアルによって救われたことは枚挙の暇がありません。本年度大会もこれに倣ってマニュアルを作成、伝達してバトンを渡していきたいと存じます。

また、今後の年次大会の益々の発展を願って、一般会員の皆様にも下記のいくつかの問題点をご理解いただき、改善への御協力をお願いできましたならば幸甚です。

第一に、国際交流について。本年度も昨年度と同じく2日目午後に特別セッションを設けて、KAMES（韓国）、イラクをはじめ数多くの海外からの研究者の参画を得て、本学会の特色を大いに発揮することができたと存じます。その一方で、海外からの参画者のアテンドにかんして、大会実行委員会、学会事務局、受け入れ会員の連携に若干の齟齬が生じたことも事実です。多くの国際学会の通例に倣って、フライトスケジュールの連絡、発表要旨の形態・事前提出、当日のPC環境確認、配布ハンドアウトの事前準備などのルールを徹底し、役割分担の原則を明確にすることが必要になってきています。

第二に、事前振込について。ここ数年、事前振込が減少の一途を辿っています。この状況が続きますと、懇親会の設営、冊子プログラムの印刷、当日ハンドアウト準備などに大きな支障が生じます。受益者意識の高まりを指摘する向きもありますが、本学会の年会費が1年先送りで徴収されていますように、会員相互の仲間意識・同職意識を発揮して戴きまして、事前振込への協力をお願いいたします。また振込みに際して、指定用紙を用いずに内訳を記さない方がおられますが、同じように混乱の原因になりますので、振込み内訳を御記入ください。さらに年会費を合わせて振り込まれる方がおられますが、会計処理上に支障をきたしますので、お手数でも年会費は実行委員会ではなく、学会事務局宛にお振込みください。

第三に非会員参加の扱いについて。非会員の参加は会員勧誘にもつながるなどプラスの面もありますが理事会や総会においてきちんとした方針・ルールを確定する必要があります。上記の事前振込問題に記しましたように、予期せぬ多数の非会員の参画は、事前に準備した冊子プログラムや発表ハンドアウトの準備に支障をきたし、場合によっては当日支払いの会員に冊子プログラムが行き渡らない、ハンドアウトが払底して会員に行き渡らず刷り増しを待ちながら発表を聞かなくてはならないなど事態が生じかねません。

多々、現況の問題点を列記いたしましたが、年次大会にご参加いただいた皆様、ご協力いただきました皆様に御礼申し上げます。（実行委員会）

【大会決算】

収入（円）		支出（円）	
大会開催費	300,000	韓国中東学会招聘	333,790
東洋大学学会開催援助金	300,000	通信費	60,550
日本中東学会国際交流費	33,790	要旨集印刷費	208,880
大会参加費（事前登録 123 名）	123,000	印刷・制作費	64,230
大会参加費（当日登録 90 名）	98,000	消耗品費	21,851
懇親会費（事前登録 75 名）	370,000	懇親会費	599,907
懇親会費（当日登録 56 名）	278,000	2 日目弁当代・バイト昼食代	61,425
2 日目弁当代（43 名）	43,000	学生アルバイト代（11 名）	199,360
2 日目弁当代（事務局 11 名）	11,000	振込手数料	1,260
書店寄付	35,000	託児所（実行委員会負担分）	40,537
錯誤振込	13,000	錯誤振込返金	13,000
計	1,604,790	計	1,604,790
		収支差引残高	0

託児所会計報告

収入（円）		支出（円）	
実行委員会負担	40,537	ベビーシッター代（派遣 2 名）＊	76,720
学会予算より補填	36,183		
計	76,720	計	76,720

*利用者は 3 名

『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告

『日本中東学会年報』（AJAMES）編集委員会よりご報告いたします。

1. 平成 24 年（2012 年）の編集体制

青山弘之編集長の任期満了にともない空席となった編集長に関し、理事会での議をへて、林が就任することになりました。「総会の報告」で報告されている理事会細則の変更を前提としております関係で、編集長任期は理事の任期である 2013 年 3 月末までとなります。1 年間、どうぞよろしくお願いします。

なお、今年度の編集委員会の体制は次の通りです。

編集委員長：林佳世子、副編集委員長：飯塚正人、桜井啓子、青山弘之

編集委員：阿部るり、池田美佐子、粕谷元、近藤信彰、武石礼司、竹下政孝、縄田浩志、藤元優子、保坂修司、堀井優、松永泰行、山尾大、横田貴之

2. 28-1 号の編集が終了しました

7 月 15 日付で 28-1 号が刊行されます。論文 5 本、書評 1 本、博士論文要旨 4 本が掲載されています。まもなくお手元に届くと思います。乞う、ご期待。

3. 28-2 号の編集が進んでいます

去る 6 月 1 日に投稿を締め切った 28-2 号の編集作業がはじまっています。多くの投稿をいただき、ありがとうございました。刊行は、2013 年 1 月の予定です。

4. 29-1 号にむけ、次の締切は、2012 年 12 月 1 日です

多くの論文、研究ノート、書評論文、研究動向、書評の投稿をお待ちしています。また、中東研究諸分野で博士号を取得された会員の皆様には、是非、「中東研究博士論文要旨」コーナーを通じての情報提供をお願いいたします。

本学会ホームページ『『日本中東学会年報』への投稿』を参照のうえ、ご投稿ください。

5. CiNii の利用が増えました

『日本中東学会年報』の掲載論文・記事は、国立情報学研究所 学術情報ナビゲータ CiNii (サイニィ) 経由でも閲覧・ダウンロード可能です。その利用は年々ふえており、2011 年度には、閲覧数は 4730 に達しました。これは、学会収入にもつながっています。ふるってご利用ください。

6. 編集委員会体制と、今後の課題について

5 月開催の総会で承認された理事会細則変更により、今後は、評議員による理事選挙で選出された理事の間から本誌編集長が任命されることになりました。理事会の役割分担を考え、理事の数も 2 名増員されました。次回の評議員選挙と理事選挙が今年末に予定されていますが、会員の皆様には、その選挙が間接的ながら、編集委員長候補者選出の意味をもつという点をご理解いただき、ご投票いただければ幸いです。

なお、『日本中東学会年報』は、現在、一つの岐路にたっています。ご存じのように『日本中東学会年報』は、欧文・和文の混合した形態をとり、欧文率 50%以上が対象となる「欧文誌」として科学研究費補助金の助成を受け、出版されてき

ました。しかし、今年度募集分より科学研究費補助金研究成果公開促進費「学術定期刊行物」の制度変更がアナウンスされており、今後、「学術定期刊行物」への助成は、100%の「欧文誌」と「それ以外」という区分で行われるとされています。助成金なしでの出版は学会の財政問題に直結することから、今後、この問題にどう対処するかが大きな課題となります。日本の中東研究の発信の場として、いかに『日本中東学会年報』を位置付けていくかについて理事会などでも議論をしていくこととなりますが、会員の皆様からのご意見をいただければ幸いです。

(林佳世子)

地域研究学会連絡協議会報告

地域研究学会連絡協議会(JCASA)関連の情報を、ごく簡単に御報告致します。日本中東学会は同協議会の設立以来、その運営に深くかかわっており、その事務局担当は終えたものの、現在も5幹事学会の一つを務めています。去る2011年11月26日には、本協議会の年次総会が開催されました。詳細内容は、協議会のホームページ(<http://www.jcas.jp/asjcasa/jcasa-newsletter.html>)からダウンロード可能なニューズレター次号(現在編集中の第6号)に譲るとして、ここではとくに東日本大震災関連の学会単位の取組みについて、情報提供が求められたことのみお伝えしておきます。また、協議会のニューズレター第5号(電子版のみ)が完成しておりますので、やはり同ホームページから閲覧いただければ幸いです。

(大稔哲也)

会員の異動

【新入会員】

穂山 祐子

臼杵 悠

荏屋 紀子

川本 智史

黒田 彩加

高橋 雅英

田中 友紀

辻田 俊哉

土屋 一樹

富永 枝理香

Alaa Farouq

Mahmoud

Ibrahim

Mai M. Al

Moatasim

Mostafa

【所属先・連絡先の訂正・変更】

五十嵐 大介

井上 貴智

今井 宏平

上野 雅由樹

宇野 陽子

川床 睦夫
鹿島 正裕
亀谷 学

荏谷 康太

吉川 卓朗

黒田 賢治
小島 宏
小村 明子
近藤 久美子

武田 歩
竹田 新

苗村 卓哉

奈良本 英佑
子島 進

橋爪 烈

松本 隆志
嶺崎 寛子

【2011 年度末をもつての退会者】

飯山 陽 池田 修 池田 有日子 遠藤 義雄 柏原 弘明

勝又 郁子	神原 達	北村 文夫	木村 有里	倉茂 由美子
古林 清一	佐藤 江美	定森 大治	白神 小鈴	杉田 聖子
瀬戸 邦弘	高瀬 知哉	高橋 陽子	高堀 英樹	中江 和津彦
中島 順子	中村 満次郎	日野 恵美	樋山 貴彦	藤井 宏志
古川 直樹	松本 高明	水谷 宮三	宮地 明子	森 裕之
森本 公誠	山浦 公美代	山中 啓介	吉田 行香	和賀 えり子
渡部 次雄	ナビ・ソンボリ			
Isam Mohamed Reayd Hamza	Ilhan Shahin	Modjtaba Sadria		

寄贈図書

【単行本】

- アジア太平洋フォーラム・淡路会議『第12回アジア太平洋フォーラム淡路会議』
アジア太平洋フォーラム・淡路会議、2012年。
- 上野稔弘ほか編『「情報災害」からの復興——地域の専門家は震災にどう対応するか』JCAS Collaboration Series 4、地域研究コンソーシアム、2012年。
- 岡戸真幸『エジプト都市部における出稼ぎ労働者の社会的ネットワークと場をめぐる生活誌』Institute of Asian Cultures, Sophia University Monograph Series No. 9、上智大学アジア文化研究所、2012年。
- 私市正年『原理主義の終焉か——ポスト・イスラーム主義論』山川出版社、2012年。
- 日下部尚徳ほか編著『地域研究とキャリア・パス』JCAS Collaboration Series 5、地域研究コンソーシアム、2012年。
- 塩崎悠輝編著『マイノリティ・ムスリムのイスラーム法学』日本サウディアラビア協会、2012年。
- 塩田勝彦編『アフリカ諸語文法要覧』溪水社、2012年。
- 柴宜弘監修、百瀬亮司編『旧ユーゴ研究の最前線』溪水社、2012年。
- 高橋理枝編著『東アラブの女性に関する文献解題——シリア、ヨルダン、レバノンの女性労働を中心に』アジア経済研究所、2012年。
- ティヨン、ジェルメーヌ『イトコたちの共和国——地中海社会の親族関係と女性の抑圧』宮治美江子訳、みすず書房、2012年。
- 西芳実、山本博之編『地域研究コンソーシアム「地域の知」シンポジウム報告書——中東から変わる世界』JCAS Collaboration Series 5、地域研究コンソーシアム、2011年。

- 日本大学生物資源科学部国際地域研究所『インドネシア東カリマンタン・マハカムデルタにおける開発が陸水生態系に及ぼす影響と環境修復』龍溪書舎、2012 年。
- 日本西アジア考古学会『平成 23 年度考古学が語る古代オリエント——第 19 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、2012 年。
- 野中葉『インドネシアの大学ダアワ運動再考——サルマン・モスクにおけるイスラーム運動の思想と現代的意義』Sophia Organization for Islamic Area Studies Research Paper Series No. 7、上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構、2012 年。
- ペルヴィエ、ギー『アルジェリア戦争——フランスの植民地支配と民族の解放』渡邊祥子訳、白水社、2012 年。
- 三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会——基礎データと研究案内』Sophia Organization for Islamic Area Studies Research Paper Series No. 8、上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構、2012 年。
- 百瀬亮司『セルビア語読解入門』大阪大学出版会、2012 年。
- 森戸幸次『中東和平構想の現実——パレスチナに「二国家共存」は可能か』平凡社、2011 年。
- 吉村大樹『チュルク諸語研究のスコープ』溪水社、2012 年。
- 依田純和『アラビア語エルサレム方言文法研究』溪水社、2012 年。
- „Die Wunder der Schöpfung“Mensch und Natur in der türksprachigen Welt(Istanbuler Texte und Studien 9), Ergon-Verlag GmbH, 2012.
- NurIchwan, Moch. *The Making of a Pancasila State: Political Debates on Secularism, Islam and the State in Indonesia*. Tokyo: Sophia Organization for Islamic Area Studies, 2012.
- Takashina, Y. (ed.). *Toward Hetero-Symbiosis and Tolerance: Lingua-Culture Contextual Studies in Ethnic Conflicts of the World*. Lahore, Pakistan: Sang-e-meel Publications, 2012.

【逐次刊行物】

- 『アラブ・イスラム研究』第 10 号、関西アラブ研究会、2012 年。
- 『季刊アラブ』No.140、No. 141、日本アラブ協会、2012 年。
- 『地域研究』第 12 巻 1 号、2 号、京都大学地域研究総合情報センター、2012 年。
- 『地域研究コンソーシアムニューズレター』No. 12、2012 年。
- 『上智アジア学——特集：21 世紀の南アジア』第 29 号、上智大学アジア文化研究所、2011 年。

- 『東方学会報』 No. 101、東方学会、2012 年 12 月。
- 『日本クウェイト協会報』 No.227、日本クウェイト協会、2012 年。
- 『日本クウェイト協会報』 No. 1-224、1966 年 11 月～2010 年 9 月、日本クウェイト協会。※電子化したファイルを DVD に焼いたもの。
- 『民族紛争の背景に関する地政学的研究』 Vol. 19, 豊穰と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬、菅瀬晶子著、大阪大学世界言語研究センター、2012 年。
- 『民族紛争の背景に関する地政学的研究』 Vol.20: 平成 23 年度報告書、大阪大学世界言語研究センター、2012 年。
- 『要覧 2012』 国立民族学博物館、2012 年。
- 『NEWSLETTER No. 7 —京都大学 Global COE Program 生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点』 京都大学東南アジア研究所、2012 年。
- 『sadāqah 日本サウディアラビア協会報』 No. 226、2012 年 3 月。
- Annual report '11*. The Center for Strategic Research of the Ministry of Foreign Affairs (SAM), Turkey, 2012.
- Awraq: Revista de análisis y pensamientosobre el mundoárabe e islámicocontemporáneo*. No. 4, 2011.
- Bulletin of the American Research Center in Egypt*.No.200 (Spring 2012). American Research Center in Egypt, 2012.
- Bulletin of the School of Oriental and African Studies*.Vol. 75, No. 1. Cambridge University Press,2012.
- Center for Strategic Research Vision Papers*. No. 1-2. The Center for Strategic Research of the Ministry of Foreign Affairs (SAM), Turkey, 2011, 2012.
- Perceptions: Journal of International Affairs*. Vol. XV, No. 3-4, XVI, No. 1-3, XVII, No. 1.The Center for Strategic Research of the Ministry of Foreign Affairs (SAM), Turkey, 2010, 2011, 2012.

事務局より

早いもので、事務局が慶應義塾大学に移ってから既に 1 年以上経ちました。第 14 期も折り返し地点を過ぎたことになります。昨年度は国際大会等の大きなイベントもなく、事務局の運営は例年に比べ楽だったのではないかと思います。本年度は 10 月に AFMA 大会が韓国の釜山で開催されます。その次の AFMA 大会 (2014 年) は日本で開催される予定です。また、同じ年には第 4 回中東研究世界大会 (WOCMES-4) がアンカラで開催されるなど、今後は国際的な活動が目白押しで

す。第14期の事務局は、大きなイベントがなかったかわりに、ウェブサイトの移行、独自ドメインの取得、ニューズレターの電子化など、インターネットによる情報発信を強化してきました。今後とも会員の皆様のご協力をお願いいたします。

(新井和広)

編集後記

日本中東学会ニューズレター紙版の最終号です。ニューズレターの第1号を編集し発送したのは、何を隠そうこの私。なので、紙版最終号を編集することには、ちょっとした感慨があります。思えばあの頃の学会事務は家庭の内職のごときありさまで、二十数年後にニューズレターが40ページを越えるようになるとは、想像もできませんでした。ニューズレターをデジタル化することに決めたのは、世界的な情報通信環境の変化に対応するためですが、この学会が安定期・成熟期に入って、会員相互の交流や情報交換をより大きなスケールで、迅速感をもって行わなくてはならないためでもあると考えています。

日本中東学会の成長ぶりには目を見張るものがあり、女性会員が多い、個人ベースでも国外の学会での研究発表に挑戦する会員が増えている、などジェンダーやナショナリティの面でより前衛的な性格を持っているのかな、と思ったりします。しかし定職のある女性会員は男性会員に比べてはるかに少ない、そして非日本国籍の会員も少ない、という日本社会の実情を映し出している面もあります。

最近のニューズレターの端々で、学会の運営を安定化させるための方策が必要であることが繰り返されていますが、日本には中東研究をする独立の研究機関が少ない、奨学金が少ない、などの問題を学会の外側に訴えかけてゆく必要もあると思います。そのためにも、より多くの研究成果・研究事情や研究者の存在をウェブサイトで発信する意義は大きいと思うのです。そして、個人的には、ネット上で会員同士がもっと気楽に、あるいは親密に一タメロで?!—交流できるフォーラムのような仕掛けができないかな、動画で優れた発表やスピーチを公開できるようになるといいな、などと夢見ています。

これまでニューズレター編集—結構、骨が折れるんですよ—に携わってきた皆さんの尽力を讃えて～これまでの128号のニューズレターに128本の真っ赤なバラを!!!

(山岸智子)



カラーでお見せできないのが残念です (事務局)

会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2013 年度会費の郵便振替用紙、あるいは、それ以前の会費に未納がある方には、該当する年度も明記した郵便振替用紙、が同封されておりますのでご利用ください。AJAMES に未送付分がある場合は、2012 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。会費納入率は低い状態が続いており、学会事務局の運営にも支障を来しかねない状況です。是非とも会費納入を宜しくお願い申し上げます。請求会費額は 2012 年 6 月末の入金確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

日本中東学会ニューズレター 第128 号

発行日 2012 年 7 月 18 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒223-8521
神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1
慶應義塾大学商学部
新井和広研究室内
日本中東学会事務局
電話/ファクス：045-566-1247
E メール: james@james1985.org
<http://www.james1985.org>
郵便振替口座：00140-0-161096（日本中東学会）
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店（普）5346808
（日本中東学会 代表 臼杵 陽）